

アブル・ファズル自序を読む

近 藤 治

はじめに

本稿は、ムガル朝時代を通して最もよくその名の知れわたった歴史家アブル・ファズナル（Shaikh Abu'l-Fazl 1551-1602）がその著『アクバル会典』（*Ā'in-i Akbari*）の末尾に付した自序を全訳して紹介したものである。自序といえば司馬遷が『史記』の末尾に付した太史公自序を想起するが、アブル・ファズルもまた自分の父祖や家族、そして自分自身の来歴について詳しく述べた「自序」を用意し、これを『アクバル会典』の末尾に付載している。この自序の冒頭部で、アブル・ファズルは次のようなことを述べている。当初彼には「独立した論説」として書物の形で現行の自序で述べているような内容を非常に詳細に書き上げていくという考えがあった。しかしそのうちに『アクバル会典』の一部としてそのなかに収める形をとるという考え方に落ち着くに至った、と。アブル・ファズル自序もまた、太史公自序が『史記』末尾の第130巻として配されているように、『アクバル会典』の末尾に配されることとなったのである。

アブル・ファズルがアクバルからその統治時代の公認の歴史書すなわちアクバル時代の正史を執筆するよう慫慂を受けたとき、彼はこの歴史書を皇帝生誕から30年毎に1巻を配した史伝部と制度集成部との2つの部門から構成されるものとする構想を持っていた。これが当初アブル・ファズルの抱いた大構想としての『アクバル・ナーマ』の構成であった。大構想『アクバル・ナーマ』の史伝部は編年体で書かれるアクバル一代の年代記であり、アクバルが皇位にあって統治を続けている限りその叙述はいつまでも継続されていくべきものであ

った。従って正史『アクバル・ナーマ』史伝部の最末尾にアブル・ファズルが自序を配置しようとするれば、9歳年少の彼は当然それを果たせるものと考えていたのかもしれないが、アクバルの治世第47年夏（1602年8月）、アクバルの命を受けてデカンの任地から都アグラへ帰還する途次、あろうことか彼はサリーム（ジャハーンギール）の使喉で暗殺されてしまったのだ。彼は自らの運命をあたかも予知していたかのように、彼の自序を『アクバル会典』の最末尾に付してすでに書きおえていた。件の自序が成ったのは、彼の非業の死よりも4年余早い1598年3月のことであった。

今回は紙数の関係で、ひとまずアブル・ファズルの自序を全訳して紹介することに止めることにする。この自序は *Ā'in-i Akbarī*, ed. by H. Blochmann, 2 vols. (Bib. Ind., 1872, 1877, Calcutta, reprint, Osnabrück, 1985)〔カルカッタ版と略記〕, Vol. II, pp. 258-283に収められており、これには「著者についての何がしかの説明」(Nubẓī az aḥwāl-i muṣannif)なる見出しが付されている。本稿ではこのカルカッタ版の当該箇所を自序の全訳のための底本とし、そのページ数を各ページの始まる冒頭部にパーレンに入れて示すことにした。また Syed Ahmad Khan が編者となっている3巻本 (Lucknow, 1869)〔ラクナウ版と略記〕, Vol. III, pp. 325-360には、この叙述は「著者とその父祖たちについて (Dar ḥāl-i khud o niyāgān-i khud gūyad)」なる見出しのもとに収められており、これを校本として利用した。また優良写本と目される大英図書館所蔵の写本 *Ā'in-i Akbarī*, BL Add. 7652〔BL写本と略記〕は、巻末に「幸運の書 (アクバル・ナーマ) の著者および兄弟たちの先祖についての説明」

(Aḥwāl-ābād-i ajdād-i rāqim-i iqbāl-nāma ma' barādarān) と題した自序を配しており、これも校本として利用した。翻訳では H. S. Jarrett 訳の英語版 *Ā'in-i Akbarī*, Vol. III, Calcutta, 1894, reprint, Osnabrück, 1983〔英語版と略記〕を参照した。アブル・ファズルの自序は Regarding Some Accounts of the Author と題して pp. 417-451に収められている。またウルドゥー語版は Muḥammad Fadā 'Alī 訳の2巻3分冊版が Hyderabād-Deccan, 1938-1939, reprint, Lahore, 1988に刊行されており〔ウルドゥー語版と略記〕、当該の自序は「著者とその先祖たちの事情」(Hālāt-i muṣannif wa buzuragān-i

muṣannif) と題して Vol. II, pp. 389-426 に収められている。ただしウルドゥー語版には、読者が知りたいと思うペルシア語原文に対応するウルドゥー語の訳文が示されずに原文がそのまま引かれているような場合が少なくない。

この小論は、かなり長大なアブル・ファズルの自序全文を邦訳し、その内容をできるだけ正確に紹介することを目的としている。カルカッタ版編者ブロックマンの行った改行はすべて生かすとともに、さらに必要と思われる改行を加えて読みやすい邦文となるよう意を用いた。また原文の理解を正確なものとするために必要な言葉を補って訳しているところがあり、そうした補足語はキッコー〔 〕のなかに収めている場合があるが、一一断っていない場合もある。言語の表記や簡単な説明、言い換えはパーレン（ ）のなかに収めておいた。ヒジュラ暦の西暦への換算は Swamikannu Pillai, *An Indian Ephemeris, A. D. 700 to A. D. 1799*, Vols. V, VI, Madras, 1922, reprint, Delhi, 1982 に拠っている。

(258) 著者についての何がしかの説明

この大冊の書（ここでは大構想のアクバル・ナーマを指しているようだ）の著者には当初、天国にいる父祖たちの模範的な事蹟並びに著者自身の行いに関して何がしかの珍しい事柄を書き記して独立した論説に書き上げ、遠見の効く知識人たちのための忠告の糧にしようということが念頭にあった。しかしながら、さまざまな事柄への忙殺、とりわけこの叡知の書（アクバル会典）を書き上げるために、そうしたことすべてを放置せざるをえなかった。とかくするうちに靈感が次のように示唆してくれた。すなわち、世間は大部の独立した書物の形で著者の行いを急いで書き記すことを望んではないし、またそれのみならず、事宜に適したものに關してはその一部をこの書のなかで述べることで、多少の場所を設けてそこで著者の過ぎにし日々のことを少々選り出して描くのがよい、と。この天から届いた幸運な示唆に従って当初の計画を断念し、心は軽くなった。

血統を自慢するのは、貧困の故に祖先の遺品を売り飛ばしたり、名の知れぬ品物を市場に持ち込むようなものであり、また正気を失って他人の美点を吹聴

したり、自分の欠点に目をつぶるようなものであるので、私はそうした意図をもって飾り立てたり述べ立てたりしていくことを望まない。悪魔の住む荒野（世間）においては、血統の繋がりはいずこへも導かないし、外面的な由来に灌漑してみたところで、それが内面的な安楽所にとって意味をなすものでもない。対句2首。

知恵なき者である如く父のことを気にすることなかれ

父のことは忘れて美德の息子たれ

煙が光から生まれていないのは明らかなのに

火はまさしく煙の息子であるのを何とする

(259) 当世の言い草では血統は祖先や氏、育ちといったもので解釈され、それでもって身分の高下が決められる。賢明で思慮深い者は知っている、父祖以来現在に至るその中間にいる者たちは、あるいは外面的な富を増大させ、あるいは内面的真実の知悉によって優越性を獲得して、名前や称号、職業、居所を得て名声を博するというように、その地位が変動してきたことを。他方、庶民たちは人類がアダム（Ādam）の子孫であると真に受けており、またこの始祖物語を受け売りした者たちはそれに共感しているが、一方懐疑的な者たちはこれに同意せず、表面上はこの件に関してできる限り距離を置いて、かの卓越した大祖アダムの子孫であることに信を置かないのである。ならばなぜ用心を怠らぬ恵まれた人がこの物語に目をつむり、無為に安住したまま真実の探求から手を拱いているのであろうか。ノア（Nūḥ）の子孫にとって父祖の神智（īzād-shināsi）にどんな利益があったというのか。また神の友なるアブラハム（Ibrāhīm）にとっては、原初の偶像崇拜者（but-parastī）からどんな損傷を受けたというのか。対句。

愛の虜たれ、血統を諦めよ、ジャーミー（Jāmī 15世紀ホラーサーン出身のペルシア語詩人）よ

この道に謀の息子彼謀はついぞいないがゆえに

しかしながらかの人（ここではアブル・ファズル自身を指す）は天命によって偶像崇拜（rasmiyān-i šūrat-parast）の慣習のある世界に生まれ、血統を功績よりも重視する人々と相混じることとなった。そこでやむなくそのこと（著者

の血統)について少しばかり述べ、テーブルを回してこうした人々のために備えることとする。

尊敬すべき父祖たちを数え上げていくことは、長い物語となる。こうした父祖たちを当世の詮索好きにどうして売ることなどできよう。父祖たちのうちある者たちは神聖の服をまとい、ある者たちは世俗の知識を身につけ、ある者たちは統治(imārat)⁽¹⁾の禄を食み、ある者たちは商業に従事し、ある者たちは隠遁生活を営んでいた。長い間、イエメンの地がこの英明な先祖たちの故地であった。5代前の父祖シャイフ・ムーサー(Shaikh Mūsā)は若いころに人々を忌避するようになった。彼は家を捨てて遊行の道を選び、知恵と行動を伴として、世界の居住地を驚異的な行脚で渡り歩いた。ヒジュラ暦900年(西暦1494/1495)ごろ、シーウィスターン(Siwistān)⁽²⁾地方の快適な町レール(Rel)⁽³⁾において天命によって遊行を断念し、探求心の強い敬虔な人々と姻戚関係を結んで新郎となった。彼は砂漠から町へとやってきたが、隠遁生活から家庭生活に急ぐことはしなかった。彼は知恵の革布の上に座っている時でさえも、自分の高貴な感覚を自己の抑制下に置くようにし、移ろいやすいこの世の人心を莊嚴するために、変わることのなかった自分の生活を改めていこうとした。幸いに満ちた息子たちや孫たちは彼の敷いた典礼の信奉者となって満足し、形而上並びに形而下の学問を学んだ。

ヒジュラ暦10世紀のはじめ(16世紀初期)、シャイフ・ヒズル(Shaikh Khizr)は、インドの何人かの神秘主義聖者に会いたいという願望、並びにヒジャーズ地方を訪ねて自分の同族に会いたいという願望をいただき、旅に出た。彼は自分の親族や友人たち数人とともにインドの方向(ṣaub-i Hind)へと向かった。ナーガウル(Nāgaur)の町では、マフドゥーム・ジャハーニヤーン(Makhdūm Jahānyān)の弟子で精神的後見によって豊かな財を築いていたウチュ出身のミール・サイイド・ヤヒヤー・ブハーリー(Mīr Sayyid Yaḥyā Bukhārī Uchī)や、著名な神秘主義的聖者サイイド・アブドゥルカーディル・ジリー(Sayyid ‘Abd al-Qādir Jīlī)の子息の一人であるシャイフ・アブドゥッラッザーク・カーディリー・バグダーディー(Shaikh ‘Abd al-Razzāk Qādirī Baghdādī)、それに世俗上及び精神上の旅を行って多くの真理

の完成品を集めていたシャイフ・ユースフ・シンディー (Shaikh Yūsuf Sindī) が人々の教育と訓導に尽くしており、世人たちはその導きによって種々の宝を手に入れていた。この英明な賢者たちの親愛と慰藉のゆえに、

(260) かつまた住むに適した親しみやすい土地柄のゆえに、かの旅人となったシャイフ・ヒズルはこの地ナーガウルに住みつくことを選んだ。

ヒジュラ暦911年 (1505/1506) シャイフ・ムバーラク (Shaikh Mubārak) は知識の樂園から生まれいでて、実在のマントを肩に羽織った。彼は旺盛な理解力を有し4歳にして知恵の光を発し、日々増していくその光明によって彼の祝福された顔は輝いた。彼は9歳のときに情熱の元手を見つけ出し、14歳のときに通常の諸学を学びとり、それぞれの学問分野の教本を暗誦した。神の加護がまだ気の抜けない幸運者 (シャイフ・ムバーラク) のキャラバン隊長となつてはいたけれども、そしてまたこの幸運者は多くの賢者たちのところで教を乞うてはいたけれども、主としてシャイフ・アタン (Shaikh ‘Aṭan) に付き随つて過ごし、彼の教を受けることによって、シャイフ・ムバーラクの内奥の渴望は一層増大した。シャイフ・アタンはトルコ人の出身であり、120歳まで生きた。この人物はシカンダル・ローディーの統治時代 (1489-1517) に、かのナーガウルの町を自分の居住地とし、トゥーラーンとイランで学んだことのあるシャイフ・サーラル・ナーガウリー (Shaikh Sālār Nāgaūrī) に仕えながら、高度の知的段階に到達していた。

さて要するに、シャイフ・ヒズルはシンドの地に戻ってきたのである。彼が考えていたのは、縁者たちをレールの町からナーガウル地方に連れてくることであつた。だが彼の生涯はその旅の途中で果ててしまった。ナーガウル界限では激しい飢饉が起こった。悪疫が人々を恐怖に陥れた。シャイフ・ムバーラクは母親以外、すべての人々を失ってしまった。父上は一貫して世界を旅する決意を変わることなく抱きつづけ、あらゆるところにいる賢者たちに会い、神の恩寵を探し求める熱意に燃えていた。しかし貞節な母君がそれに許可を与えることはなく、またムバーラクにもそれに背く気持ちはなかった。こうした内面的葛藤のときに、ブハーラー (Bukhārā) 出身のシャイフ・ファイヤージー (Shaikh Faiyāzī) —彼に神の聖化がありますように—と会い、彼の心は一層

昂ぶった。

かの清明な聖者シャイフ・ファイヤーギーは、知恵の発達初期段階にあった神の僕しもべのようなシャイフ・ムバーラクに一瞥を落とし、それ以来内心の啓発と永遠の至福を彼に教えることが日課となった。ムバーラクはファイヤーギーに弟子となることを乞い、身の処し方を質したところ、次のような回答をえた。「近いうちに一人の高名な誘導者が現れ、知恵の探求者たちの指導を行うこととなる。彼はウバイドゥッラー（‘Ubaidullāh）という名で尊称はホージャ・アフラール（Khwāja Aḥrār）となるはずである。その時を待って、彼の指示(4)を受けよう」と。ホージャは当時足ずれができるほどあちこち奔走し、真理の万能薬（jān-dārū）を探し求めて飽くことがなかった。ファイヤーギーは成就の時（死期）が近づくと、真理把握の至上段階に到達した。ムバーラクはその彼から神を探求する教えを受けた。

一方ホージャの方は、その隠遁的生活が彼の素性を隠し、定めない暮らしぶりが常態となった。ホージャのことばのなかでダルウェーシュ（darwesh イスラームの托鉢僧）に言及する場合は、この地方の特異な人物を意味するのが常であった。ホージャは40年近く中央アジアの諸地方で暮らし、荒野や山中での一人暮らしを満喫した。御年120歳を迎えても、なお内身の熱い印しは溢れるばかりだった。ある晩、父上は自分の生誕地であるナーガウルの町で、何人かの祝福を受けた聖者たちと真実の金言（宗教）について語り、心を照らす数々の深遠な事柄を明らかにしつつあった。その時突然、溜め息をつく声(5)が聞こえ、神々しい稲妻が走った。いかに思いを巡らしてみても、手がかりは見つからなかった。（261）翌日大いに探索しあちこち調べてみると、さる壺作りの家のなかにかの精神的巨人ホージャが隠遁していることが明らかとなった。この人の意志の光によって、私の父上はしばらくの間心が安まり、迷いの気持ちは起こらなかった。そして4ヵ月間ずっと幸福が続き、ホージャの鍊金薬（ikṣir）を目にすることによって日々試金されていた。そのうち間もなくホージャの天国への旅立ちが起こることとなった。心を諸々の真実で充満させ、真実を求める人々に導きを示し、満足と歓喜につつまれてホージャは旅立っていった。(6)

この当時、父上に教えを垂れていた家庭内の清浄なお方（ムバーラクの母）がこのはかない世から姿を隠した。マールデーヴ（Māldēv）⁽⁷⁾ 事件が空白期を生み出した。父上は海岸地方（キャンベイ湾岸地方）で隠遁生活をするために、そこへ向かった。目的はただ一つ、世界の諸地方を旅して人々の諸集団から豊かな幸運を手に入れることであった。グジャラートのアフマダーバードで、父上は著名な人々⁽⁸⁾に加わって新たな学問に通じ、そのすべての主要な分野で高度の証明書を取得した。マールイク（Mālik）、シャーフィイー（Shāfi'ī）、アブー・ハニーファ（Abū Ḥanīfa）、ハンバル（Ḥanbal）、イマーミーヤ（Imāmīya）などの流儀⁽⁹⁾（ā'in）を学び、原則上並びに派生上の問題に通暁した。また激しい探求心をもってイジュティハード（ijtihād 法解釈、立法行為）の段階についても注意を向けた。先祖からの繋がりによってアブー・ハニーファの学派⁽¹⁰⁾に関係があったけれども、父上は常に行いを最も広い包括性（aḥwāṭ）でもって飾り、模倣を奴隷の立場にたつものであるとした。また自分にとって重荷となるものでも、これを受け止めた。そして幸遇と幸運に恵まれたおかげで形而下学（'ilm-i zāhir）から形而上学（ḥaqā'iq-i ma'nawī）へと進み、現実世界の安楽所が彼を精神世界（mulk-i ḥaqīqat）へと導いた。スーフィズム（taṣawwuf）と照明学派⁽¹¹⁾（ishrāq）の方法を学び、瞑想（naẓar）と祈禱（ta'alluh）⁽¹²⁾に関する書物を読み、とりわけシャイフ・イブン・アラビー（Shaikh ibn 'Arabī）⁽¹³⁾とシャイフ・イブン・ファーリズ（Shaikh ibn Fāriẓ）⁽¹⁴⁾とシャイフ・サドルッディーン・クーナウィー（Shaikh Ṣadr al-Dīn Qūnawī）⁽¹⁵⁾の学説を学んだ。多くの著名な学匠たちが父上に好意の視線を投げかけた。数限りない成功を博した尋常でない方法が、父上の名声を増大した。神から与えられた大きな恩恵のうちでも、ハティーブ・アブル・ファズル・カーザルーニー（Khaṭīb Abu'l Faṣl Kāzarūnī）に勤仕したのは特別の光栄であった。この人は鑑識眼と人物評価力によって父上を養子にし、さまざまな学問の教授に意を注いだ。父上の養父はシファー（Shifā'）⁽¹⁶⁾とイシャーラート（Ishārāt）⁽¹⁷⁾の独特の特徴や深遠な内容、およびタズキラ（Taẓkira）⁽¹⁸⁾とマジスティー（Majisṭī）⁽¹⁹⁾の精妙な内容を記憶するよう父上に命じた。哲学の園には新たな生気が立ちのぼり、父上の洞察力の滲出は新たな発展段階へと向かった。

かの理性的なものを追求する賢明な御方であるハティーブ・アブル・ファズル・カーザルーニーは、グジャラートの王たちの尽力によってシーラーズからこの地方にやってきて、知識の花園に新鮮な輝きを加えた。この人はさまざまな集団に属す当時の学者たちから学んで知恵の探求を果たそうとしたけれども、真実と知性に関する学問（イスラーム神秘主義）に関してはマウラーナー・ジャラルッディーン・ダッワーニー（Maulānā Jalāl al-Dīn Dawwānī）の弟子であった。この人はまた当初自分の父親のもとで基礎的な諸原則を習得し、その後シーラーズでマウラーナー・ムヒーウッディーン・アシュクバール（Maulānā Muḥyī al-Dīn Ashkbār）とホージャ・ハサン・シャー・バッカール（Khawāja Ḥasan Shāh Baqqāl）の講筵に受講生として出席した。これら2人の学者は、サイイド・シャリーフ・ジュルジャーニー（Sayyid Sharīf Jur-jānī）⁽²⁰⁾の著名な弟子であった。父上の養父は、占星術に通暁していたマウラーナー・フマームッディーン・グルバーリー（Maulānā Humām al-Dīn Gul-bārī）の学園にしばらくの間往来して（262）知識の灯をともし、よき指導者をえた幸運によって並はずれた理解力を獲得した。そして哲学の諸書を脳髓に刻み、それらの意味するところを雄弁に表現した。なぜなら彼の作品がそのことをよく示しているからであり、それによって称賛を博しているからである。

アフマダーバードにおいて、父上は当時の著名な聖者たちの一人であるシャイフ・ウマル・タッタウィー（Shaikh ‘Umar Tattawī）に勤仕する幸運をえた。この聖者はあらゆることにおいてその準則となりうる優れた能力を具えており、立派な書き手となる方法や旺盛な知識を口移しの方法で父上に教えた。父上はシャッターリー（Shaṭṭārī）派やタイフーリー（Ṭaifūrī）派、チシュティー（Chishtī）派、スフラワルディー（Suhrawardī）派といった多くの伝統的な諸教団から学んで恩恵を受けた。またこの町では、内心の陶醉と恍惚を説く賢者たちの一人であるシャイフ・ユースフ（Shaikh Yūsuf）のもとに同席し、また別の知恵の元手を手に入れた。父上はいつも神の顕現（shuhūd）の海に浸り、しかも神への勤めにとって一つの儀礼といえども決して手を抜くことはなかった。神の慈愛を浴びていたため、父上は心の内奥から知的な刻銘を消し去り、因襲から手を引き、絶対的な優美さ（jamāl-i muṭlaq）⁽²¹⁾に

没入してみたいという願望が生じた。かの心の館の徴候を読み取る養父はこれを察知して、父上の決心を断念させ、真珠で飾られた言葉で次のように提案した。海路の旅 (safar-i daryā⁽²²⁾) が予定されている。首都のアーグラに向かって探求の歩を進めるがよい。もしその地で仕事が見つからなければ、トゥーランとイランの方に向かうがよい。そしてどこでも暗示があって内心に命令を感じれば、そこで鞍を投げ下ろして滞在し、通常⁽²³⁾の教育 (‘ilm-i rasmi) を自らの種ぐさの事情のマント (生活の糧) とするがよい、と。

この幸先のよい示唆に従って、父上はジャラーリー暦 (Ta’rikh-i Jalālī⁽²⁴⁾) 465年ウルディービヒシュト月 (Urdibihisht ペルシア暦2月) 1日、すなわちヒジュラ暦950年ムハッラム月6日水曜日 (西暦1543年4月11日 水曜日)、幸いの町である首都アーグラへ願わくば至高の神が災厄から守ってくれますように一にめでたく到着した。この富裕の地において、父上はシャイフ・アラウッディーン・マジュズーブ (Shaikh ‘Alā’ al-Dīn Majzub) と懇意になった。この人は心の敷石と墓の秘密を読むことができた。この人は宗教的没我状態から正気にもどった際、父上に次のようにおっしゃった。神の命ずるところは、この幸運の町に止まって放浪を断念することである、と。こうして福音を伝え、父上の旅行癖をなだめられた。父上はジャウン川 (ヤムナー川) のほとり、イーージュ (Īj イラン南部ファールス地方の町名) 出身のミール・ラフイーウッディーン・サファヴィー (Mīr Rafī‘ al-Dīn Ṣafavī) 家の近隣⁽²⁵⁾に落ち着いた。そして知恵と行いで目立つクライシュ族の家族と姻戚関係を持ち、居住する街区の首長と懇意になった。かの真実に満ちた学者のミール・ラフイーウッディーンは、この若手の知識人の到来を何よりのことと思い、熱烈に歓迎した。彼は富の手立てに恵まれていたので、父上が彼の長衣のなかに入る (支援を受ける) ことを望んだ。父上は幸運の導きと温情の助けを得ていたのをこれを謝絶した。そして何ものにもとらわれない大志に依拠する方途を選び、内的瞑想と外的探求によって幸福の糧を確かなものとした。ミール・ラフイーウッディーンはハサン家とフサイン家の両家につらなる著名なサイドの一人である。この人の祖先の様子がシャイフ・サハーウィー (Shaikh Sakhāwī 15世紀エジプトのハディース学者) の作品のなかで多少述べられている。彼らの故地はシ

ーラーズのイーグ (Īg イージュに同じ) の町であったけれども、その昔ヒジャーズ地方に旅行して以来彼らの一部はこれら両地方 (シーラーズとヒジャーズ) に住みつき、与え手となったり貰い手となったりして活動している。

(263) ミール・ラフィーウッディーンは、理性的学問並びに伝承的学問を由緒ある自らの家系の祖父たちのもとで学んだが、しかしマウラーナー・ジャールッディーン・ダッワーニー (Maulānā Jalāl al-Dīn Dawwānī イランのファールス地方で活躍した学者、1427-1502) の教えを受けて新たな知見を獲得した。また彼はアラビア半島において、シャイフ・イブン・ハジャルル・アスカラーニー (Shaikh ibn Ḥajar al-‘Asqalānī エジプト出身の著名なハディース学者、1372-1449) の弟子でエジプトのカイロ出身のシャイフ・サハーウィーからさまざまな分野にわたる伝承学を学んだ。

ミール・ラフィーウッディーンが954年 (西暦1547) に天国の宿へと旅立つと、父上は自分の部屋に引きこもってしまった。父上はいつも内面を清浄に保ち、外面の真珠 (姿) を整えることに努めるとともに、神の厚誼を求めることに精励した。彼はさまざまな学問の教授に専念し、古人の見解をもって自分の流儀を覆うヴェールとした。そして自分の願望については龍のような舌を断ち切った。⁽²⁶⁾ 父上は、心のおける人びとのうち何人かの幸運に恵まれて注目されている人びとのなかから、明白な証しがある場合は自分の同志に加えた。⁽²⁷⁾ 些細なことでも、これを容認した後になってから程よい程度に受け入れた。そして他の人々に対しては言い訳を立てて交わりを慎しみ、それによって自らの手を汚すことはなかった。僅かな機会のうちに彼の住居は学者たちの溜まり場となり、年とった者や若い者の再起の場となった。人々は嫉妬心からあれこれの会合を設けたり、あるいは親愛感から父上と私的な会見をもったりしたが、彼は前者によって悲しむことも後者によって喜ぶこともなかった。シェール・ハーン⁽²⁸⁾とサリーム・ハーン⁽²⁹⁾その他の著名人たちは、内帑金 (wujūh-i sulṭānī) から何がしかを父上が受け取るように、そしてまた生活費用に恩賞地 (tuyūl)⁽³⁰⁾を設定してもよい旨提案した。しかし父上は高い志操と気高い自尊心をもっていたので、これに肯んぜず、自らの尊厳を増幅させた。

父上は人々を内面において指導することに得手であり、神の宮廷からそれを

適性に行なうよう命ぜられていた。また当世の聖者たちの賛同を受け、父上は好意を寄せる人々の支援と親切は日毎に増大していた。父上はいつも講筵への来訪者たち並びに知恵の探求者たちに真実を語り、人々のよくない慣習についてはこれを非難するのを常とした。一方、自己愛のあからさまな信奉者たちは害毒をもたらすことを繰り返し、よこしまな考えを抱いていた。父上は敵対的な議論が発生することに心が動くことはなかったので、弾劾と追従の試みが自らの精神世界の周辺に生じることはなかった。真実を讃え悪業を咎めることに手ごろを加えることはなかった。また論争好みの年寄りたちを救済しようとする者に対して、考慮を払うこともなかった。

こうしたことの故に、並ぶものなき神は誠実心をもつ友人たちと幸運を手にした息子たちとを彼に授けた。彼は常に高尚な学問的会話のうちに時を過ごしていたが、アフガン人の支配時代（スール朝時代 1540-55）には宗教学（dānīshhā-yi ḥaqīqī）について説くことはあまりなかった。世界の番人であるフマーユーン帝（Jannat Āshiyānī⁽³¹⁾）の至高の旗先の月形が新たにヒンドゥスターンに輝きを取り戻すと、何人かのトゥーラーン人やイラン人たちが精神と世界の諸特徴を読み取る父上の学園にやってくるようになり、学者たちの集まりが再び活気を取り戻した。そして認識の早魃^{とりこ}によって生じる渇きに足しては、灌漑によって平野に水が溢れるようになり、不安の虜^{とりこ}となった退避者たちは安静の楽園（ムバーラクの学園）に止まるようになった。今や邪見の眼を引くような激しい騒動は許されなくなったにもかかわらず、ヘームー（Hemū⁽³²⁾）は勇猛の拳をふりあげた。当世の善良な人々は自己卑下の隅にかくれ、あるいは失望の旅の途についた。父上は精神力でもって隠遁の小屋のなかにしっかりと足場を保っていた。神の支援を受けてヘームーは、長老たちを送り込んで弁明を請うた。そこで父上の仲介によって、多くの人々は悲しみの隘路を抜け出て喜びの楽園へ入っていった。

（264）皇帝が玉座に即かれた年（1556）のはじめに、まるでヘンルーダ（sipand^{うんこう}⁽³³⁾ 芸香）を国中で焚いて邪眼（‘ain al-kamāl）を排除するかのよう激しい早魃^{とりこ}が起こり、離散のほこりがたちのぼった。アーグラの町は荒廃し、数家を除いて痕跡をとどめなくなった。この災害の重荷に加えて、蔓延した疫

病が世人にはかりしれないほどの惨禍をもたらした。ヒンドゥスターンのほとんどの町はこの災厄と人命損傷に襲われた。父上は以前と同じ町の一角に大志の足を踏み止めており、たちのぼったほこりが心に降りかかることはなかった。私はその当時5歳であつた。⁽³⁴⁾このころ私の知恵の光はまだ洞察力のアーチの前方で輝いていたので、あの災厄の程度を明白な言葉で尽くすことはできないし、もし言葉の形をとったとしても人々の聴取可能な狭隘に届くことはないであろう。私はこの当時の出来事を記憶によくとどめており、他の目撃者たちの証言はそれと一致する。この時代の困難さが多くの家族を崩壊させ、人々は次々と没していった。父上の住居では老若男女70人が生きのびたようだ。当時の仲間たちは生活環境の解放性と修道者たち⁽³⁵⁾ (darweshān) の快活さに驚いていた。そしてそれが魔術や魔法によると思っていた。時に1セール (ser 重さの基本単位で約900グラム) の穀物が手に入ると、父上はそれをいくつかの土鍋で炊き込ませ、その煮汁をこれらの人々に分配した。最も不思議なことは、この住居においては日々の糧食の心配がなく、神の崇拜を考えること以外何事も父上の心に入り込むことがなかったことである。そして、神の慈愛がすべての人々の上に注ぎ、広くゆきわたった豊かさが歓喜の顔を輝かすまでは、自己の本質について熟慮すること並びに精神の遍歴に注意を向けること以外、父上は他の何事にも心を奪われることがなかった。

皇帝の旗幟が光輝を放ち、日毎に増大する正義によって世界は特別の輝きに恵まれるようになった。理性 (khirad) に満ちた宮廷は勢威を増し、知恵 (āgahī) のあふれるものには高値がつけられた。諸々の科学 (funūn) とさまざまな学問 (anwā‘i dānish) が盛んとなった。新機軸の主張や典雅な見解、重大な発見がつぎつぎと登場するようになり、さまざまな人々は知識 (‘aql) の宝庫からはかりしれない恩恵を受けるようになった。父上の隠遁所は七氣候帯 (haft kishwar 世界) の学者たちの集まる所となり、そこでは高尚な言葉が飛び交った。それとともに陰鬱な嫉妬心に点火がなされ、卑しい悪意が増幅された。父上は自己の命ずるところに集中して、惰性の道に進むことはなかった。また自発性の門に腰を下ろして、受動性の道を急ぐことはなかった。経験が乏しく近視眼的な人々は、辛抱しきれなくなって虚言の道を歩みはじめた。

多くの人々は父上がマフディー派 (guroh-i Mahdawīyya)⁽³⁶⁾ に属すとし、とりとめのない話をもとにしてあれこれの作り話を作り上げた。かれらは当世の単純な輩どもを興奮させ、心中邪悪な考えを抱いてひどい災厄をもたらした。こうした連中のよこしまな武器となる証拠物件⁽³⁷⁾ というのは、ただシャイフ・アライー (Shaikh ‘Alā’i)⁽³⁸⁾ の事件だけである。

インド (Hind) にはミール・サイイド・ムハンマド・ジャウンプリーを予告されたマフディーと見なして、そのように主張する人々がいるようだ。彼らは彼のいう教義やその行為・品格といった信仰の根拠となるものを傍においたまま、この一派に信を置いている。サリーム・ハーン (イスラーム・シャー) の時代に、シャイフ・アライーという名の若僧が外面的並びに内面的な装いを身につけて、この渦のなかに飛び込んでいった。そしてアークラにおいて、先ずもって隠遁と禁欲の実践のために父上に会いにやってきた。騒動を引き起こす口実を探そうとしていた者どもにとっては、(265) 調子はずれの声をはり上げて非難するための元手がえられることとなった。当時の学者たち (‘ulamā) は学問を小売りする蒙昧者たちであり、解毒剤の振りをした毒草であった。彼らは父上に対して悪意をもって起ち上がった。そして父上の根源的な統一体 (心身) をばらばらにする (抹殺する) ためにいくつもの機会を設け、法廷開設を承認させた。父上は彼らに対して妥協することはなかった。知見と実践の面においてこの連中から得るところは何もなかった。彼らはヒンドゥスターンの支配者 (marzbān) の前で決着をつけようとし、自分たちのよこしまな思惑をいだいて足掻きの道を踏みしめた。統治の任にあった国王は当時の学者たちを招集し、法典上の宣告を得ようとするのに懸命であった。彼らは父上をもその会合に召喚した。彼らから質問を受けると、父上は虚栄を求める者どもの御託並べに反撃して回答した。この日以来、彼らは激しい敵意をもって父上がかのマフディー派の流儀にくみしているとし、マフディーの存在が伝承に合致するかどうかといった問題が一例であるような事柄について、頑然になって父上の行為が消滅してしまうようにあらゆる手筈を調べようとした。何人かの性悪者どもはシーア派の方策が父上の隠れた考え方だと思い込み、非難の道に身を委ねた。彼らは知識と信仰とが別物であることを理解していなか

った。

とりわけこの時期には、イラク出身のサイイドの一人が⁽³⁹⁾この時代の人として学問と実践を統一し、言葉と行動を一致させていた。しかしながら着衣の裾は嫌疑で汚染されていた。とはいえ国王（スール朝イスラーム・シャー）の庇護により、誅殺の手は彼の着衣の裾までは届かなかった。ある日、国王の出席した会合で頑迷な学者たちは次のように具申した。ミール・サイイド・ムハンマド・ジャウンプリー⁽⁴⁰⁾の信仰は法にかなっていない。彼の証言が否認されているからには、彼の後に従うことにどんな価値があるというのか、と。彼らはハナフィー派のいくつかの古文献の記述を証拠として持ち出してきて、イラクの貴族（ミヤーン・アブドゥッラー）は証言として聴取できないと言った。事態はミール・ジャウンプリー〔の信奉者〕にとって面倒なことになってきた。シャイフ・アラーイーは同胞の絆をもっていたので、父上に真実を打ち明けた。父上は知恵の湧く多くの言葉を伝えて、悪意に満ちた者どもの主張に対してもっと毅然とした態度をとるように勧めた。そして彼らのそのような主張に対しては真珠の言葉でもって、かの伝承の意味が正しく理解されていないと、次のように論じた。この点に関してハナフィー派の文献で述べられているのはアラブ人のイラク（‘Irāq-i ‘Arab）を意図したものであって、非アラブ人のイラク（‘Iraq-i ‘Ajam）を意図したのではない、と。実に多くの文献章句を、父上はこのような意味によって明確にした。また次のようにも言った。彼らは貴族のなかの貴族（ashraf-i ashraf）と一般貴族（ashraf）との間に区別を立てていない。というのは応報の程度に応じて、臣民たちは4段階に区分されるからである。第1は貴族のなかの貴族であって、これには博士たち（ḥukamā）やイスラーム学者たち、サイイドたち（sādāt）、聖者たち（atqiyā）が含まれる。第2は一般貴族であって、これは高官たちや地主たち、およびこれに類した人々を意味する。第3は中間の人々であって、彼らは商工業に従事している人々と解されている。第4はこうした人々の水準に達していない下層の人々であって、卑しい下層民がこれに含まれる。そしてそれぞれの段階に対して別々の処遇が描かれ、善行をなした時にはいかなような処置をなし、それぞれの者が行った悪業の報いをどの程度とするかが決るのである。実際、すべての悪業者

を同じ罰に処するならば、正義の大道から足を踏みはずしたことになる、と。

ミール・ジャウンプーリーの信奉者シャイフ・アライーはこの入れ知恵によって大胆となり、大いに喜んだ。そして自らの正当性と中傷者たちの蒙昧性を明白にするために、ムバーラクの意見を国王（イスラーム・シャー）のもとに提出した。かの無能な恥知らずの輩どもは、混惑の濠に落ち込んでしまった。どこから知恵をえたかが明らかになると、彼らの羨望に火がついた。ムバーラクのこうした支援が何度か公然化し、蒙昧者どもの混乱の原因となった。ありがたいことに、(266) さまざまな集団の人々は次の点で意見が一致している。すなわち、いかなる宗教（kesh）といえども真実（wāqi'）に反する一点の問題（amr）もないような宗教は存在せず、すべてが虚妄と化すような宗教もまた存在しない。このゆえに、ある人が認識（shināsā'i）に基づいて自らの流儀（ā'in）とは異なる信仰（mas'ala）について賛同を示したとしても、その人の内奥（sirr）に立ち入ってはならないし、その人に対する憎悪に立ち上がってはならない、という点である。この点に関して長い論争を経た後、彼らは父上がシーア派に属しているという非難に立ち戻った。しかしながらアッラーの庇護によって、誹謗者たちは一貫して破廉恥のなかに顔を埋めつづけ、混乱の余り心痛に足をすくわれていた。しかも性根悪さと見通しなきの故に、彼らは忠告を真に受けず頑なな敵意を抱きつづけて、陰謀を張りめぐらした。その結果、ついに運命の不可思議な力と時の奇跡が類いまれな絵を描き出し、手荒な四散事態（tafriqa）が警告の姿となって燃え上がった。

〔現皇帝の〕治世第14年、すなわちヒジュラ暦977年（1569-1570）、父上は隠遁の隅から姿を現し、尋常ならざる困難な事態が発生した。それについて多少とも書き記し、教訓を述べることにする。悪意に満ちたスズメバチの巣が騒ぎを絶えず引き起こし、毒ヘビの巣穴が子ヘビたちで湧き立ち、闇夜を照らす友情の灯火は消え失せ、世の善人たちは心を悪の方に傾け、敵意の扉が開け放たれた。このことは前もって予告していた通りである。しかしながら、このころには父上はすでに高遠な学識を身につけており、世の名士たちが教えを受けるため父上のもとに足を運び、大勢の人々で活況を呈していた。父上は自己の規範に従って軽蔑すべき者どもの貪欲を数え上げ、友人たちや好意的な人々に

対しては慎み深くしていた。時流に乗ったイスラーム学者たち（‘ulamā）や当世の長老たち（mashā’ikh）は、父上の幸運な人柄が自分たちの罪を写し出す鏡であることを知っていたため、彼らは悪意をもって事態を取りはからおうとした。彼らは自ら邪悪でねじれた考えに取りつかれしまい、もし公正な皇帝のもとで個々の事例が検証されるならば、自分たちの有していた古い信頼感がどんなにか回復し、その結果誰かの上（即ちムバーラクの上）に非難されるべき状況が定着していくことになろう、と思うようになった。だが落胆といらだちに打ちひしがれた挙句の果て、彼らは復讐を果たそうと企み、中傷の館（buhtān-sarā’i）に向かって大きな一步を踏み出した。そして彼らは偽計と偽善を用いて、宮中の数多の廷臣たちに遺憾の言辞を弄しながら彼らを邪道へと導いていった。何人かの性悪どもは宗教上の偏狭心を掻き立てて騒動を引き起こさせようとした。

長らくの間このような卑劣な状態は続いたが、幸運をもたらす公正な人々の支援をえて、性悪どもの跳梁の市場はいつも解散させられていた。そうした時、正道を歩む一群の人々は正当な業務から遠ざけられた。そして宮廷の饗宴を取り仕切る中心人物が怨恨を晴らそうとした。恥知らずの性悪で不敬なこの卑劣漢は、恨みを晴らすべき時を得た。父上は神に仕える友人の家を訪ねていて、私はそれに随行する幸運を得ていた。人を欺くかの尊大な自慢家（マフドゥームル・ムルク）もその場に居合わせており、手の込んだ講話を開陳した。私の頭のなかで学問と青年の英気が汪溢した。私はそれまでマドラサ（madrasa ムバーラクの経営する学校）以外の催しの場に足を踏み入れることがなかったので、得るところのない彼の口舌を聞いて私は発言を求め、多くのことを口にした。その結果彼は恥じ入り、その場を目にした人々は驚き入ってしまった。

この日以来、彼は無慈悲に復讐しようと身構え、また意気消沈していた人々を強力に激励した。父上は彼らの目論見に無頓着であったし、私は自分の学識（āgahī）に陶醉して軽率になっていた。はじめのうちの拝金主義の不信心者は、遣り手の策士の常道として、表向きは任務の遂行と宗教の莊嚴のためと称し数多くの会合を催した。そして（267）⁽⁴⁰⁾ 穩健派に属す人々に夜討ちをかけて、多数を破滅の隅に押し込んだ。だが世の君主（khidev-i ‘ālam）が良き考

えと優れた目的を持って宗教と学問と正義に関する事柄を器量の備わった一群の人々に委ねるような場合、そして君主自らはそうした事柄に対して無頓着のマントを肩に掛けて清廉、誠実さに物惜しみしない場合、だが学術への無関心は表向きの姿であって、政府の高官たちは術策用のガウンを着ているのが本当だとした場合、そういった場合には宗教的偏狭 (ta'aṣṣub) は復活し⁽⁴¹⁾うる。その結果、家族は崩壊し名誉はすっかり凋落することになる。こうした時期には、墮落した悪徳者たちは善良者ぶり、まるで生娘と偽って売女^{ばいた}を花嫁に送り込むかのように振舞い、破廉恥漢の俗物どもは勝利を収め、心の暗い偏狭者どもは結束し、心の通った友人たちは遠ざけられ、正論を吐く者は疎んじられ、熾烈な不敬の争いの会合が相互に秘密の仲間を生み出して、精神的迫害の協定 (paimān-i dil-āzāri) を新たに結ぶことになる。

無節操な偽善者にして人を惑わす腹黒の墮落者たちの一人が、キツネ狩りよろしく父上の学院 (dānish-gāh) に首尾よくもぐり込んできた。彼はかのねじれた心根の連中との親交を増大させようとし、かつまた神の冒瀆と狂気をかき立てようとして、さる夜半に送り込まれてきたのだ。件の狡猾な詐欺師はその日の真夜中に、心臓を打ち振るわせ眼に涙をため、青ざめた顔色をし憂鬱な表情をして、私の兄の部屋に駆け込んできた。そしてその間抜けは悪ふざけのまじないを俄仕込みでかけて、狡猾と術策に疎い人 (兄のファイジー) を唆かせた。この人物が口にしたことの概要は次の如くであった。「世の有力者たちは性懲りなく互いに争っている。彼らは不敬な忘恩の破廉恥漢たちである。今や彼らは勢いをえて、迫害を加えはじめている。多くの宗教指導者たち (arbāb-i 'amā'im) は証人となり、何人かを告発者に立てて、中傷者を特定するためにもっともらしい口実を作り上げている。この人物が宮廷内でいかに高い地位と権威を得ているか、また頭角を現してきた者に対して、自らの榮譽を守るためにいかにして足をすくい、いかに狂暴な弾圧を加えたか、誰もが知っている。親友が彼らの秘密会 (khalwat) に加わっている。この親友がこの真夜中に私に知らせてくれたので、私は動顛^{どうてん}して君に伝えることにした。1日油断して取り返しのつかないこととなってしまうはいけな。現下において道はただ一つ。たった今、父君を誰にも覚られずに人目のつかぬところに連れて行き、数日間そこ

に隠遁しておれば、友人たちは和解して事の真相を宮廷に奏上することになっている」。

かの好人物（ファイジー）は恐怖感にとらわれた。そして我慢できなくなって父上の寝室に行き、先程来の事の次第を打ち明けた。父上は次のように言った。「敵どもは強力ではあるが、至高の神はすべてを存知し、公正な皇帝が全世界の学者たちの頂点に座しておられる。もし一握りの不敬、不信の徒が恥知らずな根深い妬みを抱いているとしても、すべての誓約はなお生きており審問はまだ終わっていないはずだ。またもし私の災厄に関し神意がまだ下されていないとしたならば、それらの災厄すべてを束ねたとしても、それらは私に災禍を加えることはできないし、災害も危害も何一つ私にもたらされることはない。もしも創造主（jahān-āfirin）の意志がここにあるのであれば、私もまた欣然として命をそれに委ねるものであり、この束の間の命に執着するものではない」と。（268）兄は気が動転し、不安に駆られて真理の判断基準（haqīqat-ṭarāzi）が非現実的となっていた。申し開きをすること（sūr-angezi）が悲嘆をもたらすものであると考え、短剣を取り出して次のように言った。「交渉することと神秘主義（taṣawwuf）について語ることとは別のことです。父上が行かれないのなら、私は我が身を今立ち所に斬り割きます。後のことは父上にお任せします。私には絶望の日を待つことは、どうしてもできないのです」。父上は父親としての絆と愛情に動かされて、兄の願いを受け入れた。物静かなこの老師の命令によって、私もまた起ち上がった。

止むなく闇夜のなか私たち3人は歩いて戸外に抜け出した。だが道案内人もいなければ、歩く気力もなかった。父上は運命の転変の不可思議について考え込み、沈黙していた。一方私と兄はといえば、双方ともこの当時国政（kār-i mulk）と交渉事（shaghī-i mu‘āmala）に関しては至って無知であったが、話し合って避難場所について相談した。兄が思いつく人物はすべて私が反対し、私が提案する人物はことごとく兄が同意を拒むという具合であった。二行連句（qit‘a）。

敵どもは憎惡の拳を挙げしというに

共鳴すべき友愛は届くことなく

唯一の世界主（皇帝）を常に憶念すれども

仲介の者は一人とてなし⁽⁴²⁾

多大の苦労を経た後に、ようやくにしてさる人物の家にたどりついた。この人物の誠実さについては、兄は確信を持っていた。私の方は実存の黎明期にあって経験不足であり、陰謀のあれこれが有する初歩的な害毒についてさえ疑いを抱くことはなかった。この人物は物静かな様子の大人たちを見てひどくびっくりし、会いに出たことを後悔して戸口に止まっていた。彼はやむをえず逗留用の場所を用意した。混乱したその住宅のなかに入っていくと、屋内の気配は彼以上に当惑状態であった。奇妙な事態が生じ来たって、不可思議な悲嘆が私たちの心にすっかり取りついてしまった。兄は私のそばに寄ってきて言った。

「多くの知識があるにもかかわらず、私は間違ってしまった。汝はこの件に関し一層的確に判断を下せるかもしれない。即今為すべきは何なのか、考うべき方途は奈辺にあるのか、休息はどこで取ることができるのか」。私は次のように答えた。「まだ何も起こっていない。引き返して自宅に戻り、私を私たち3人の代弁者（nā'ib-i sukhan）にして欲しい。そうすれば世人たちを覆う瞞着の帳は引き上げられ、難局も打開されることになるだろう」。父上は私の意見を称賛し、これに同意した。一方兄は私の提案した方式に反対して、次のように言った。「この件に関し君は何も分かっていない。またこの連中の狡猾さと極悪非道についても、君は気付いていない。この荒野から立ち去ろう。話し合いは、道すがらにしていこう」。

人生経験上の砂漠を旅したことは、それまでの私にはまだなかった。また人々の利害にかかわることもまだなかったが、神から受けた靈感（ilqā-yi ilāhi）によってさる人物が思い浮かんだ。そこで私は次のように言った。「内心に光が射してきた。事態がうまく運べば、彼はきっと支援してくれるはずである。しかしながら状況が厳しければ、協力者となってくれるのは難しいであろう」。時間は切迫しており気が動揺していたので、彼のところに向かって歩を運ぶこととなった。足に水疱を出しながら粘っこい泥道を歩き、この世の転変の不思議さについて思いを致した。最強のハンドル（'urwa'i wuṣqā 真実の信仰の手立て）が手元から離れ、意気消沈の道を踏み占めながら、自ら求め

る世界を思い浮かべた。そして一步一步重い足取りを青息吐息で進め、例えようもない悲しみに打たれながら、悪人どもの復活の日（rastā-khez）が目前に到来しようとしていると思った。

（269）早暁、かの人物の戸口に到着した。事態を知って彼は暖かく支援し、親切に滞在場所を用意してくれた。こうしてさまざまな心配の種は少しばかり軽減した。この避難所で2日経たとき、次のようなことがらが明らかとなった。すなわち嫉妬心に燃えた連中が怒りの帳を引き上げて、自分たちの悪意に満ちた密かな考えを公然と明らかにし、老獪な策略家よろしく、あの日の夜の明け方に彼らは皇帝のもとに奏上し、皇帝の気持ちを困惑させたのだ。宮廷から次のような内容の勅令が発布された。すなわち、国事と財政（mulk u māl）に係る事柄は宮廷の了解なしには実施されないこと、事は他でもなく宗教と信仰（mazhab u millat）にかかわるものであり、その結着はわけても宮廷の手に帰すものであること、〔逃亡者たちを〕審問の法廷に召喚し、崇高なイスラーム法の命ずるところ並びに現下の政府が定めるところに従ってこれを実行に移すこと、という内容の勅令である。宮廷の廷吏たち（chāwushān）が任命されて探索のために急派された。事情を察知すると、廷吏たちは八方手を尽くして探し出そうとした。悪事をなそうとする無頼漢どもは廷吏たちと一緒にになり、私たちが我が家に居ないことを知ると、的外れの言葉を真に受けて我が家を包囲し、弟のシャイフ・アブル・ハイル（Shaikh Abu'l-Khair）を家中に見つけ出して宮廷へ連れて行き、あれこれ無数の潤色を施して逐電ばなしを作り上げた。そしてそれをもって恥知らずな言いがかりの口実とした。

予期せぬ天上的な支援を受けたおかげのことなのだが、⁽⁴³⁾陰険に事を運ぶ誹謗者たちの襲撃とその非常識な手口について、頭脳明晰な皇帝はその報告を受けて次のように返答した。「隠者の托鉢僧のような人物であり禁欲的な学者気質の人物の行ないに関し、この騒動は一体どうしたことだということか。またかくも際限のない喧騒は、どうした訳で生じたのか。かのシャイフ（ムバーラク）はよく旅にでることがあり、目下のところ物見遊山にでかけているのであろう。あの少年は何のために連れてこられているのか。また彼らの家はなぜ封鎖されているのか」。時を移さずアブル・ハイルは解放され、家の封鎖は解除された。

安全のそよ風がこの家に向かって吹いてきた。

なにがしかの不安が先行きにあって、なおも心配が居座っていた。また相異なるうわさが行き交っていたので、私たちは確信が持てず潜伏に努めた。卑しい性の者どもは気がおくれして、次のように考えるようになった。目下私たちは住むところをなくしているので、今や次の手を打つべきときであり、腹黒の悪党どもを傭って、どこであろうと見つけ出し次第息の根を止めさせるべきである、と。そして、私たちが実際の成り行きを知って宮殿に参内し、自分たちの有する学問上の卓越性によって本懐を遂げるといった事態を阻止するためには、如上の措置は必要である、と彼らは考えるようになったのである。彼らは皇帝の返答を秘匿し、代わりに恐怖を煽る文言を皇帝の言葉として撒き散らした。そして純朴な仲間たちや従順な友人たちを一層怖じ気づかせた。また彼らはまことしやかな文書を何通か作り上げ、支援しようとしていた人々の手を引っ込めさせてしまったのだ。

1週間がたつと潜伏先の主人も辛抱し切れなくなって親愛の道から逸れるようになり、彼の使用人たちは熟知者に対する作法に背くようになった。知性は不安に覆われ、困惑した思考は次の点について確信を持つようになった。すなわち、当初の一報は根拠のないものではなかった。皇帝はなお調査中であり、世間は私たちを探索中であった。だが潜伏先の主人は、間違いなく私たちを拘束して突き出しかねなくなった。激しい悲嘆が全身を覆い尽くし、心中にしみ込んでいった。私は次のように言った。「自分の体験から判断する限り、次のような程度のことまでは分かる。当初のうわさは間違いではなかった。さもなければ弟（アブル・ハイル）は釈放されなかったであろうし、(270) 我が家の封鎖は解除されなかったであろう。目下の数々の無作法は心底こたえるが、これらはすべて何かを伝えてはいないだろうか。治安が保たれているときには、偽りのうわさを耳にすると立派な人物でも騙され、敵意をもって排撃してくるものである。今、この家の主人のような人物が恐怖に陥ったとしても、それはありえないことではない。またこの家が拘束の館となるようなことがあっても、主人は外見上の素振りに変化は見せないだろうし、拘束を先延ばししようともしないであろう。〔私たちに関する〕卑しむべき悪意に満ちた作り話の創出は、

間違いなくこの家の主人を驚愕させてしまい、また使用人たちをしてこのような非難さるべき態度を取らせるまでに至ったのである。こうなった以上は、この家を去っていくことにしよう。そしてこの家の主人を精神上的の重荷から解放してやろう」。こうして私たちは少しばかり気を取り直し、出発準備にとりかかった。この日は〔自宅から逐電したあの〕最初の晩以上に陰惨な日であり、暗雲が垂れ込めていた。父上と兄は私の当初の認識と現下の事情説明とを称賛した。そして、2人は私を相談役であり信頼するに足る者であると考え、私が年少者であることには眼をつぶって、今後は私の意見に反対しないことを誓った。

夜の帳が下りてくると、心中に無数の不安が去来し、気力は困惑し、胸中は傷つき、心根は悲哀で塞がっていたが、私たちは陰惨の弥増すかの悲嘆の館から脱出した。支援者の姿はどこにもなく、足は萎え、いずくにも避難所はなく、安住の見通しとてなかった。突然、疑心暗鬼の世界に一条の閃光が輝いたかのようであった。歓喜が顔面に浮かんだ。私たちの弟子の一人の家が眼前に現れたのだ。そこで少しばかりの休息を取った。彼の家は彼の心よりも窮屈であり、彼の心は初めての夜よりも暗かったけれども、ある程度私たちは休息を取ってやり場のない窮迫から回復した。方策は尽き果て隠遁のただなかに身を置いていたが、思考は全方向に向けて活動していた。

安息の地は見つからず、平穩は到来しそうになかったので、次のような結論に至った。すなわち、これまでのところ最良の友人たちと最も古くからの教え子と最も慎しみ深い弟子たちに打診して、この何日間かを折衝に費やしてきた。現下の最も賢明な方策は、学問にとって厄介な所であり災厄の地に過ぎなくなっているこの偽善の町（アークラ）を立ち去って、当地の二面的な知人や当てにならぬ友人たちから離れていくことである。彼らが身につけている誠実さの土台は春のそよ風の上に置かれたように頼りなく、彼らが立つ永続性のある足場というのは、まるで激しい奔流の上に設けられたような脆いもので、私たちはただ岸边の方へ避難するのみである。もしかして誰かの私的な避難所が目の前に出現して、名も知らぬ慈善家が保護を申し出てくれるかもしれない。そしてその避難所において、現在の皇帝の状態について情報が手に入るかもしれない

いし、皇帝の寛容と立腹の程を把握することができるかもしれない。私たちの側に実行可能な力があり、かつまた僅かながらでも公正さを引き立ててくれる篤志家が存在すれば、その篤志家たちのもとに身を委ねることによって時流の動向を把握することができる。幸いにして時節が到来し運が開けてくれば、再び事態は好転しよう。仮にそうはならなかったとしても、広大無辺のこの世が縮小してしまうようなことはない。いずれの鳥もとまり木と巢の床を持っており、この酷薄の町アーグラに永住しなくてはならぬという通達 (barāt) が出ている訳ではない。この町の郊外には、さる名家が領地の所有を許されて住みついている。この人物の状況が判る日常記録 (roz-nāmcha 日々の生活ぶり) によって彼の誠実さの程を読み取ることができるし、彼が放つ信愛の香気は透徹した叡知をもってすれば嗅ぎ取ることができるであろう。今やすべての者どもから手を引いて、彼のところに避難することにしよう。そうすればしばらくの間、その地で気付かれずに安寧を確保することができるかもしれない。俗世間的人物たちの友情は安定性や恒常性に欠けるところがあるかもしれないが、少なくともこうした人物はかくまった者を他の人々にさらし出すようなことはしないであろう。⁽⁴⁴⁾

兄は着替えをして通りに出た。そしてかの人物のいる方向に向かって (271) 急いだ。かの人物は事情を了解して、私たちの到来を願ってもない僥倖と受け止めてくれた。市 (bāzār) の立つ危険な日であったので、かの人物は何人かのトルコ人兵士を同道させ、道中危害が加えられないよう、また悪質な探索者たちの追跡を受けないようにした。絶望の真夜中にかの賢明で用心深い人物がやってきて、心安らぐ吉報を伝えるとともに暖かい助言を与えてくれた。たちどころに私たちは衣服を着替えて (変装して) 出発し、さまざまな道を通って彼の家に到達した。彼は行き届いた歓待と奉仕に尽し、深い安堵感とともに幸運の吉報を伝えてくれた。10日間は彼の宿舎で平穩に過ごし、悪運だらけであった日々からの救出へ向けて支援を受けていた。だが突然、以前に起こったものよりもさらに激しい騒動が運命の天空 (āsmān-i taqdir) から降り注いだ。突如としてこの人物が宮廷に召喚されたのだ。そして2番目の男が正気を失ったのと同じ酩酊物 (bāda) によって、この純朴な人物の支援事業も同じ

ような仕向けを受け、2 番目の男以上に醜態させられて（正常な判断を失って）しまったのだ。彼は友情の羊皮紙をたちどころに折り畳んでしまった。

さる夜、これまで滞在中であった彼の家を出て別の友人のところに寄寓した。この友人は、私たちのまさかの来訪をはかりしれぬ褒章であると受け止めた。だが近所に性悪で騒動好みの者が住んでいたのも、友人は甚だしい混乱に陥り、心労で正気を取り乱してしまった。人々が寝静まったころ、私たちは定まった当てもないまま悲嘆の足取りを踏み出した。どんなに知恵を絞ってみても、またどんなに注意を払ってみても、安息の場所は浮かんでこなかった。止むなく、心は不安でいっぱいになり思いは悲しみに包まれたまま、かの友人の家に舞い戻ってきた。非常に驚いたことに、家の人たちは私たちの出立に気付いてはいなかった。僅かの間ながら崩れかけた神への信頼関係は回復し、取り乱しは克服された。兄の考えは、ここから出ていったのは恐怖（wāhima）に駆られたからであって、理性の命じたものではなかった、というものであった。当家的カメレオンのような主人は自分の状況に応じてどのようにでも変化するものであり、陽の当たる方角と周辺状況の変化とを何よりも重視する人物であることを〔兄に〕説明したが、効果はなかった。また使用人たちの様子にも〔こうした徴候は〕顕著になっていたけれども、別の方策は思い浮かばなかつた⁽⁴⁵⁾。かの気の変わりやすい近視眼的で愚鈍な人物は、「この気のきかぬ人たちは気を遣って自分たちの方からこの家を出ていつてはくれないだろう」と考えて、真昼間に挨拶することもなく、また知遇者同志の言葉を交わすこともなく、金銭盲者のようにテントを畳んで出て行ってしまった。

私たち 3 人は荒野のなかに、いつまでも座り込んでいた。その近くには、馬市（nakhkhās）が設けられていた。それは実に奇妙な光景であった。私たちの踏み止まるべきところもなければ、行き先の当てもなく、人目を遮るヴェールとてなかった。どこをむいても二心のある友人たちであり、あの手この手を擁す敵対者たちであり、手強い随落者たちであり、あちこちをうろつき回って長続きのせぬ事大主義者たちであった。私たちは避難場所のない荒野のなかで、為す術もなく土埃の上に座り、深刻な事態と打ち続く難儀に遭遇して、いつまでも続く悲嘆に沈んでいた。だが、ともかくも立ち上がって一歩でも進むこと

が欠かせぬことであった。私たちは悪意をもった人々のなかを旅して行った。神の庇護 (ḥirāsāt-i ilāhi) のヴェールが人々の眼を遮ってくれた。神の (izadi) 助けと保護によってかの恐ろしい場所を抜け出し、同宿したことのある恐怖の館並びに世人たちとの近い関係をすべて投げ捨て、見知らぬ人々の軽蔑と知遇の厚意との双方から超絶して進んでいると、小さな公園に行き着き、そこで休息することを思いついた。

消失していた気力が再び戻ってきて、心に旺盛な活力が湧いてきた。偶然明らかとなったことなのだが、(272) 何人かの恥ずべき取り調べ役どもがここにやってくることがあった。彼らの徘徊で気分は暗くなったが、しばらくの間ここで落ち着いていた。私たちは内心ぼろぼろに疲弊し、外見でも憂色が濃くなっていた。私たちの行こうとするところは、いずこも突如として災いの地と化した。そしてその場で暖まる間もなく、私たちは危険な荒野に向かうのがいつものことであった。こうして惨めな逃げまどいと見通しのつかぬ流浪とを続けているうちに、さる園丁が私たちに気付き事態は一変してしまった。

私たちはほとんど死にそうになっており、精神は衰弱し切っていた。かの優しい心根の園丁は、種々の親切を尽して親愛の情を示し、私たちを広い街路から自分たちの家に案内して同情の気持を示してくれた。兄は打ちひしがれた状態から回復せず、時々刻々と表情を曇らせていた。私の方はそれとは反対に気分が晴れてきた。そして話しかけてきた園丁の様子と表情から誠実の表徴を読み取った。父上の方は並ぶものなき神 (īzād-i bi-himāl) とともにあって、知恵の湧く祈禱用絨毯に静かに座し、運命のもつ移ろい易さ (nairangī) について考えていた。その夜しばらく経ったころ、園丁の主人が丁重な態度で現れた。そして次のような謙遜の言葉をながながと述べた。「私のような者がおりますにもかかわらず、このような陋屋に好意をお持ちいただいて降り立ってくれました。私めの装束をどうして引き寄せられたのでしょうか」。彼は私たちが思いもかけていなかったことを果たしてくれる人物であった。私は次のように返答した。「敵対者どもの暴風が吹き荒れている最中は、誠実で心許せる友人たちすべてから距離を置くようにし、面倒な事件が彼らに及ぶことがないようにしているからです」。主人の方はやや躊躇していたが、次のように言葉を継

いだ。「私の陋屋がお気に入らないようでしたら、別の方法を考えてみましょう」。彼は安全な避難所を紹介してくれた。彼の言葉から誠実さの証しが伝わってきた。彼の意向を受け入れ、彼の選んでくれた所に身をやつして移動した。かくして私たちは望むべき最良の所に落ち着いた。この逗留地 (sar-manzil) から、私たちは真実を伝える書簡を、正義感に満ちた人々や道理をわきまえる友人たちに送り届けた。彼らは事情を解して救済のために立ち上がり、どん底状態⁽⁴⁶⁾ (ighrāq) を癒してくれた。

1 ヶ月余りの間、かの隠棲所 (ārāmish-jā) で過ごした。この間に兄はアエグラからファトフプール (Fatḥpūr ファテプルシークリー) に急行し、巨大軍営地 (Urdū-yi Buzurg 宮殿) を尋ねて同情的な支援が強化されるよう働きかけた。さる朝、人当たりがよく用心深い兄があまたの苦悩と悲哀を携えて戻ってきた。そして方今の苛酷な状況の様子を伝えた。帝国の高官たちや宮中の長老⁽⁴⁷⁾ (āq-saqālū) たちのうちの一人が、どうも素性卑しく嫉妬深い者どもから得た情報をもとにして騒ぎ立てたようで、皇帝への嘆願の規範に則ることも臣下の典礼に従うこともなく、世界主 (khidev-i ‘ālam 皇帝) の前にぞんざいな態度で進み出て、激しい口調で次のように言ったそうだ。「まさか世界は最終段階に入り、復活の日 (rastakhez) が近づいているとでもいうのであろうか、この国では狂気の悪党どもが横行し、善良な人々が困惑させられているからには。現今存在するのは、一体どんな規範なのか。今眼前に示されているのは、何という忘恩であろう」。包容力に富まれた御方 (皇帝) は、かの騒ぎ立てた長老の述べるところを聞き了えた後、次のように言われた。「誰のことを言っているのか、またその人物に何を望むのか。夢を見たのか。それとも脳味噌に狂いが生じたのか」。長老がその人物の名前を明かすと、皇帝はこの長老の歪んだ作意に驚き、次のように述べられた。「現下の長老たちすべては〔シャイフ・ムバーラクを〕捜し出して彼の命を奪うことを目論んでおり、いくつもの教令 (fatwā) の発布を承認している。彼らは余にしばらくの休息の間も与えてくれない。(273) 余はシャイフがしかじかの所にいることを知っており—こう言って皇帝はこの隠遁所の在処^{ありか}を示された—よく承知しているけれども、意図的に放置しているのだ。そして長老たち銘銘に回答を与えて譴責し

ている。汝らは事をよく弁えずに喚き立て、限度を踏み外しているぞよ。明朝誰かを遣わしてシャイフ・ムバーラクを参内させ、ウラマーたちの会合を召集するように」。

兄はこの騒ぎの一件を聞きつけると、たちどころに大急ぎで引き返してきたのだった。隠遁所の主人に気づかれないようにして、私たちは再び以前と同じやり方で別の服装に着替えて出発した。だが動揺は、失望のうちに過ごしたいずれの日々よりも甚しく、心中の混乱は弥増した。とはいうものの、人々がどの程度まで私たちに同情しているのか、また皇帝にどのような陳情がなされ、皇帝がどの程度まで事情に通じていたのか、ということについては、ある程度までは明らかであった。しかしながら、非常に強い困惑がこれ以上に踏み込んで事をなすことを躊躇させてしまった。かくしてその日の明け方、隠遁所の主人に気づかれることなく自主的に流浪の途についた。燃えるような太陽の暑熱、性悪どもの腹黒さ、路上の群衆と恥ずべき諜報者どもの横行、友人の不在、支援の欠如。木でできたペンにこのような現況から抜け出す一体どのような力があるというのか。雄弁の舌とて口ごもりをするというのに、この引き裂かれた舌に一体どのような余力があるというのか。私たちは止むなく、あれこれためらいながら人気のないところに道を取り、町の喧騒と敵どもの眼とから多少とも休まることができた。

皇帝の温情がまたしても明らかになったので、何頭かの馬を所望することにした。そしてこの荒廃の地からかの都（ファテブル・シークリー）へと急ぎ、以前からの誠実さが保証できるさる人の豪邸を尋ねることにした。そうすれば〔この人の取り成しで〕この騒ぎはおさまり、皇帝が温情の手をさしのべて下さることになるかもしれないからである。やむをえず私たちは熟練者たちがやるやり方に従って、道中の必需品を用意し、悪徳者の考えよりも暗く不条理者の作り話よりも長ながしい夜を徹して、遠路の道を進んで行った。⁽⁴⁸⁾道案内人の経験不足といかさまの誘導のため、夜の明け方になってかの人の陰鬱な邸宅にたどり着いた。この既知の人物は⁽⁴⁹⁾私たちを拒むことはしなかったが、しかしながら口に出すのがはばかれるような多くの恐ろしい情報を伝えてくれた。そして親切の証しとして、次のようなことを明らかにしてくれた。すなわちそれは、

今ではすでに適切な時期を失っており、皇帝の気持が何ほどか害されていること、今回よりももっと早く出頭していれば、痛手は受けず容易に所期の目的を果たしえたであろうこと、近くにさる村を知っているので数日間そこで身をやつて過ごさねばならぬこと、そうすれば皇帝の考えは慈愛の情に変わるであろう、というものであった。彼は私たちを馬車に乗せて、その村の所在する方角に送り出した。私たちの心はあれこれさまざまな悲嘆に絡め取られてしまった。その村に到着してみると、私たちが当てにしていた農夫は不在だった。住める場所として何もない廃屋の前に、私たちは降り立った。この地方の地所の監督者（dārogha）はたまたま関連書類を読む必要があり、私たちの様子に学問の徴候が表れていることを知って、〔人を遣わしてきて〕私たちを呼び出した。時間が逼迫していたので、拒否の道をひたすら急いだ。間もなく分かったことであるが、この村は度を越した冷酷漢に帰属していた。⁽⁵⁰⁾かの人物は愚鈍の性故に私たちをこんな所に送り込んでいたのだ。

私たちは抑えようのない不安と悲嘆をいだきながら、この村から飛び出し、面識のない案内人を雇って帝都アーグラ郊外のさる村に向かった。帝都からは友情の香気が漂ってきていた。私たちはこの日3コース（kos 1コースは約3.6キロメートル）の悪路を急いで、目的地に着いた。私たちを迎えた善良な人は丁寧な態度を示した。しかしながらここでも、いかさまの勧善懲悪者の一人が農場を所有しており、時折この村の方面にやってくるのが明らかとなった。私たちはこの地を断念し、真夜中に暗鬱な気分で（274）市中へと足速に向かった。そして早朝、帝都アーグラに入り、さる友人の居宅に到着した。しばらくの間、失望の掃き溜めにして忘却の^{ふしど}臥所であり、悪疫の魔宮にして低能の墓所であるこの居宅で、私たちは一息ついて休息した。しかしながら程なくして、この人物はかの恥ずべき神の冒瀆者たちや鉄面皮の強欲者たちの名前を口の端にのぼした。あのような邪悪で歪んだ考えを持ち、あのような物騒で取り乱した脳味噌の者どもと近い間柄にある、このような精神の持ち主に対して、私たちは心底新たな悲しみを抱き、かつまた大いなる驚愕を覚えた。私たちの足はあちこちを歩き回ったために、また頭はまどろむこともなく夜行したために、そして耳は「^{はい}入れ」の合図を示す鐘の音を何度も聞いたために、さら⁽⁵¹⁾

に眼は不眠の槍先でこすられたために、激しい痛みが心中を襲い、悲嘆の重荷が却って心を支える補助役を果たすに至った。やむなく私たちは別の計画を考えた。その家の主も場所探しに乗り出してくれた。

私たちは2日間この家に蟄居^{ちつきよ}し、一刻一刻を最後の瞬間と心得て過ごしていたところ、この難局に最適の人物が清朗な故老（シャイフ・ムバーラク）の考えに浮かんだ。そしてこの家の主の支援と熱心な探索によって、その人物の所在先が明らかとなった。数多くの吉報によって安全が確認された。ただちに私たちはこの最適のところに向かった。その家の主人は手厚い歓待によって、歓迎の気持を精一杯示してくれた。成功の微風が希望の花園の上に吹き始めた。私たちの希望に新たな輝きが生じた。この家の主人は真理へ到達するための指導者という訳ではなかったけれども、幸運については十分によく通じていた⁽⁵²⁾。彼は世に知られてはいなかったが、評判はよかった。また裕福ではなかったが経済力はある、節約を旨としつつ気前はよかった。さらに彼の物腰からは老境とともに若々しさが輝いていた。私たちにとって心和む隠遁所が戻ってきた。再び文通が可能となり、救済の道が開けてきた。

2ヵ月間この安穩の地に止まり、私たちの希望していた扉は開けられた。正義を求める篤志家たちは立ち上がり、幸先のよい知識人たちは支援の態勢を整えた。まずはじめに、こうした人々は友情あふれる言葉と友愛に満ちた心打つ説得によって、手練手管にたけた扇動者たちや水準の低い似非学者たちを圧倒した。次いで彼らは父上シャイフ・ムバーラクの称賛に値する様子を皇帝の御前で報告し、丁重かつ穩便に陳情を行なった。幸運に彩られた皇帝はその洞察力と判断力に従って、慈愛に満ちた回答を賜い、寛大さと雅量によって父上に召喚の機会を与えて下さった。私は世間のことにまだ通じていなかったのも同行の道を選ばず、光彩を発つ老師たる父上は兄を伴って嘆願の面貌を宮殿へ向けて運んでいった。老師は皇帝のさまざまな厚遇を受けて、最高の境地に達した。直ちに不満分子たちの蜂の巣は静かになった。互いに衝突していた世界は平穩となり、教育の場と清浄な隠遁所（シャイフ・ムバーラクたちの居所と併設⁽⁵³⁾の学院）は正規の姿を取り戻し、世には美徳の風習が確立した。四行詩。

おお夜よ、昨夜の諍いの全容を再現すること勿れ

我が心の秘密は昨夜の如く確然と胸中に秘せり
過ぎにし昨夜よ、汝は緩慢に過ぎ去るものを眼にせり
連携のかの夜の如く再び手を繋いでおくれ、夜よ

(275) これと同じころ、父上はデリーの聖者の宗教施設の巡拝に向かい、何人かの学生たちと一緒に私を神聖な衆会に連れて行ってくれた。父上は都アーグラに居を構えた年以来、自分の清朗な居所において精神的世界に非常に深い関心を抱いていたので、地上的な驚嘆物を見学することには関心を持っていなかった。しかしながらただ一度、こうした地上的な驚嘆物を見学してみたいという欲求が彼の心の襟を捉え、期待の裳裾が広がった。父上は私に対し、親子関係という地上的関係の外に精神的な関係を結び、特別に深い慈愛の情をもって精神的な情愛を与えてくれた。

詳細を要約すれば、次の如くである。曙光が祈禱用敷布の上に射して精神と天上界とを結びつけるころ、父上の眠りと目覚めの狭間〔の夢のなか〕にホージャ・クトブッディーン・ウーシー (Khawāja Qutb al-Dīn Ūshī) とシャイフ・ニザームッディーン・アウリヤー (Shaikh Nizām al-Dīn Awliyā)⁽⁵⁴⁾ とが現れた。〔このことがあった後〕多くの長老たちが集まって和解のための衆会 (bāzm-i muṣālaḥat) が開かれた。その時に、宥恕を乞うためこれら2人の聖者の廟に赴き、その地で何か聖者たちの教えに沿ったことを実行しようということになった。父上は天上の父祖たちの流儀を継承し、それを曇らすことなく維持していた。そして歌唱の聴聞や絹装束の魔術に傾くことはなく、またスーフィーたちの間で普及している恍惚状態や円形舞踏に関心を持つこともなかった。父上は、〔こうした祈禱法を容認する〕この流派の指導者たちを非難し、彼らが富者と貧者、称賛と論難、粘土と黄金はそれぞれ同等であるとの考えを持ち、こうした考えがこの派の事業を達成するための条件の一つであって、それが信者たち自身に社会変動の起爆性をもたらすもの (sabuk-sarī-yi talwīn bākhud) となっているとして、常に明白な言葉で批判していた。父上はまた、この流派は知識人が足を取られやすいところであるとして厳しい自制を促し、自らはこの派から遠ざかるとともに友人たちをもこの派から遠ざけていた。〔衆会の開かれた〕まさしくその夜、かの巡礼行を最近果たしたばかりの人々

が父上の寝室で休んでいたが、彼らは意図の正しさや行為の正当性について徹底した弁明を行ない、この敬虔な老人である父上の心を踏みにじってしまったのだ⁽⁵⁵⁾。

〔私たちの聖者廟巡礼は〕快適な旅行で、バラの咲き誇るデリーの多くの墓廟を訪れ、光が心中に満ち恩寵がみなぎった。もし〔この間の〕事情を詳細に述べれば、世人は作り話と思うだろうし、〔私が〕反抗的な裳裾汚し（dāman-ālay）であるとの疑いを持つことになる⁽⁵⁶⁾。この旅行の結果、私は禁欲的な佻住まいから現世的な宮廷勤めへと連れ出され、宮殿の門は開け放たれた。そして私は至高^{きぎはし}の階に昇る栄誉を獲得した。強欲に酔い痴れた者どもや嫉妬に狂った者どもの状態は、驚くべきものであった。我が心は苦悶し、彼らの混乱ぶりに同情した。私は並ぶものなき神に誓いを立て、自分自身と次のような約束を結んだ。すなわち、火のともらぬランプや印章のない令旨^{りょうじ}（nishān）に等しいこれら目の暗んだ者どもの犯した罪は、我が心中の公正な定式から外れたものであり、また善意以外は我が心中に達することはありえない、と。神の恩寵を得て、私はこの考えを堅持した。私は新たな勝利を獲得し、我が心は新たな活力に満たされた。人々のはかの者どもの墮落について話題に取り上げ、一息ついて楽しんだ。父上は訓戒を与え、人々の相互の対立、歪んだ欲望、虚偽の言説、理解の欠如についてそれぞれ指摘した。そして悪業をなす者の懲罰について注意を喚起した。私は秘匿された衆人注目の秘密を僅かでも漏らすことには気が進まず、父上がなした提起に対し、これに応ずることに気後れを覚えた。結局やむなく父上自身に起こったことを皇帝に申し上げ、父上の内奥の沸騰の伝達者となった。父上の心中の数多くの^{しこり}癩はとけ、古傷は癒された。

（276）長い話を短くすれば、帝国の事業を果たすため皇帝の旌旗が首都ラホールに翻り、我が心中が父上との別離によって当惑していた治世第32年、即ち太陰暦995年（1586-1587）に私は父上のラホール来訪を懇請した。さまざまな人々と諸地域に通じた父上は私の希望を受け入れて、治世第32年フルグード月23日、即ち上述の太陰暦995年ラジャプ月6日土曜日（1587年6月2日）⁽⁵⁷⁾に、この豊饒にして無比の地（ラホール）に慈愛の影を投じ、さまざまな愛顧でもって私に心的高揚を恵んで下さった。父上はいつも隠遁の片隅にいることをと

りわけ好み、あらゆる事柄から身を引いて、自分の日常の身辺記や移ろいやすい精神⁽⁵⁸⁾の刷新について書き綴りながら日を送っていた。

父上は外在的諸学（‘ulūm-i zāhir）については超絶していたが、常に神の本質と属性について語り、奇跡を認め、自由の境地に安座し、天与の体が種々の均衡を欠くに至るまでは、安全の裳裾をつかんでいた。父上はこの度のような病気を何度も経験していたが、今回は死出の旅であることをよく心得ていた。そして混乱した私奴^めを呼び寄せて叡知に満ちた言葉をかけられ、永別の避けられぬ次第となった。すべては二人だけの間でやり取りし、心の深奥を密かに伝えて共有したので、私は確かに心の苦悶を呑み込み、多大の困難を経て自らを取り戻し、宗教界の指導者たる父上の魅力的な人柄のおかげで、多少とも平静さを保つことができた。それから7日間父上ははっきりした意識をもって過ごし、〔治世第38年〕アムルダード月24日、即ちヒジュラ暦1001年ズール・カード月17日（1593年8月5日日曜日）⁽⁵⁹⁾天上の樂園へと旅立った。〔父上の旅立ちによって〕天上の識界は輝きを失い、神学の蒼穹は曇ってしまった。学問の背骨は終末を迎え、叡知はこの世において終焉を迎えた。木星（公正の神）は判事用のガウンを脱ぎ去り、水星（文筆の神）はペンを折り曲げてしまった。二行連句。

かの無類の賢者はこの世から立ち去り

至上の実在たる天上界の門戸は開け放たれり

かの人なくして縁者たち腑抜けの孤児と相成り

諸族の祖アダムとイエスはいずこに行けりといえしか

以上のような父上に関する記述を終え、次に僅かながら自らについて述べる事が可能となった。

私の先祖の重要な事柄について少しばかり描写したので、次に私自身について何がしか述べて心中を軽やかにし、この書の表現に潤いを与え、言葉の抑制を緩めることにしよう。

ジャラーリー暦473年、すなわちヒジュラ暦958年ムハッラム月6日、日曜日の夜（1551年1月14日水曜日）、私の無垢の精神は原初の肉体と一体となって、人間の羊膜からこの世の快い地上に登場した。1歳余りで上手にしゃべれるよ

うになり、5歳のとき人並みはずれた利発さを発揮し、(277) 読み書きの小窓が開かれた。7歳のとき、父上の宝庫（書庫）の出納係（貸出係）となって貴重な宝物類（書籍類）の監視役となり、ヘビとなって宝物の上に座っていた。まことに不思議なことに、移ろいやすい運命の転変によっていつも伝来の学問と当代の慣習に気分が乗ることも興味を覚えることもなく、それらから気持がそれていた。多くの場合は、それらをあまり理解していなかったのだった。父上は自分の流儀で知恵のまじないをかけ、あらゆる学問分野についてその要約書を編纂して私の関心を引き起こしてくれた。私にとって知識は増したけれども、学びの学園から心にしみるものは何一つえられなかった。しばしば全く理解できないことがあり、時には疑問がいくつも湧いてきた。そしてそのことを表現しようとしても、適切な言葉が見つからなかった。内気が私を口ごもりさせていたのか、それとも未熟さが言葉による表現をためらわせていたのだ。人前で泣き出すことがあったり、また自分自身を責め立てることがあった。そうしたときに、深い愛情を持った父上がそばに来て、奥手で浅知恵の私の心に寄り添ってくれた。その後父上との交流・対話を通し、日ならずして私は〔父上の経営する〕学院の学生となった。苦悩によって御し難くなっていた心中は落ち着き、私は運命のいたずらからすっかり引き離されて別人のようになった。四行詩（rubā'i）。

寺院に入れば輩^{ともがら}たち

いづれも酒盃を手になれど

騒ぎは己れをふぬけにし

私は逃げだし他者が加わる

学問上のさまざまな真実と学院の有する微妙な特徴とは、私に顕著な驚きをもたらし、またそれまでに眼にしたことのなかった書物は、既読の書物よりも一層明晰な洞察力を与えてくれた。無垢の天上より恵与された私の資質は稀有なものであったけれども、父上から貴重な感化を受け、また各分野の知識の要諦⁽⁶¹⁾に留意するよう父上から喚起されたこと、さらにまた父上のこうした一連の教化が途切れなかったことは力強い支えとなり、私の啓発にとってその重要な要因となった。さらに10年間、自分の洞窟（gūya-yi khwesh 自室）に閉じ

こもっているときや人に教えるときに、昼夜の区別がつかず、空腹と満腹の区別もつけられなかった。また孤独と和合とを区別することもできなくなり、悲哀を歓喜から切り離す力も持ち合わせることがなくなった。目で確認できるもの並びに知識に関係するもの以外は、何も理解することができなかった。私の体質を知る友人たちは、私が2, 3日食べることがなくても無事であり、向学心が逸らされないことを知って仰天し、かつまた私への信頼を深めもした。私は彼らに対して次のように言った。常識や慣習から逸れることがあるのは、病人が自分の体調の故に病気に手向^{たむ}かって食事に手をつけなくても、誰もそれに驚かないのと同じことである。仮に本質的なことがら（学問）への集中が健忘症をもたらしたとしても、どうして驚くことがあるというのか、と。

多くの学派があれこれの議論をしており、古文獻に関わる深遠な問題は我が心中の新しい文字板に記録された。こうした深遠な問題が解明される以前においては、そしてまた私が最低の無知状態から〔一転して〕叡知の頂点に位置づけられるようになるよりも以前においては、昔の学者に対して私は異議を抱いていた。しかし私の若いころを知る者たちは、私の考えに同意しようとはしなかった。そのために私の気持は動揺し、経験に乏しい心はいらだった。私の若いころ、あるときホージャ・アブル・カーシム (Khwāja Abu'l-Qāsim) の注釈書ムタツワル (Muṭawwal)⁽⁶²⁾ に関する注解 (ḥāshiya 注釈に対する注釈、疏注) がもたらされた。学匠 (mullā) や指導者 (mīr) たちを前にして私が以前に語ったことは、私の何人かの友人たちが書き止めてくれていたが、
 (278) それと同じ内容がこの注解において述べられていた。そのためにその場の人々は大いに驚き、私の見解に対する否定を差し控えて、それまでとは違った見方で私を見るようになった。彼らは非認の天窗を開け放し、諒解の扉を開け広げた。また教師としての駆け出しのころ、イスファハーニーへの注解 (ḥāshiya bar Iṣfahānī)⁽⁶³⁾ を目にする機会があったが、その半分以上はシロアリ (diwak) の幼虫が喰っていた。誰も使いものにならないものと諦めていた。私は虫喰いのところを切り離し、そこに白紙を貼り足した。朝の曙光のなかで、しばらくの間各行の始めと終わりを熟視して元の注解文を想定し、これを清書して書き入れた。そのうちにかの注解書の完全本が見つかった。これと対校し

てみると、2, 3 箇所での類義語 (taghaiyur bi'l-murādif) と 3, 4 箇所での近似語 (irād bi'l-mutaqārib) の相違があるだけであった。誰も彼も驚き入ってしまった。

こうした精神活動が拡大するにつれて、私の心は一際輝きを呈するようになった。20歳のとき自立の朗報が届き、我が心は幼児以来の束縛から脱け出して、はじめて味わう驚きを体験した。青年期に体験した学問の新酒に身を浸して酩酊が度を越し、願望の裳裾は広がり、学問と洞察力の世界を写す酒杯を手にして、狂奔の反響が再三耳に響き、私にすべてのことがらから身を引くよう促した。そうしたときに皇帝陛下が私をお目にとめていただき、無名の片隅から引き立てて下さった。それについては、この書の結論部のところで述べ、また何がしかを折に触れて述べて驚嘆の程を示しておいた。ここに至って私の硬貨は公認の刻印を受け、秤量貨幣としていずこのパーザールでも見られるようになった。世の人々はこれまでとは違った見方で私を見、情のこもった言葉をかけ、声援を送ってくれた。

治世第42年最後の日の今日 (1598年 3 月10日)、我が心は幽閉状態から再び解放された。⁽⁶⁴⁾ それとともに新たな心労が起こってきた。対句。

我が心中の鳥はダヴィデの歌を知らざるも

放たれしからには鳥籠の鳥であることなし

事態はどこに行き着こうとしているのか、そしてまたどこで荷を下ろす最後の旅 (safar-i wā-pasin) となるのか、私には分からない。しかしながらこの世に生を享けて以来現在に至るまで、神の恩寵は絶えることなく我が身をその庇護のもとに置くために授けられてきた。私の衷心からの願いは、人生最後の瞬間を神の宥恕が叶うように過ごすことであり、身を軽やかにして永久なる安息所にたどり着くことである。

神の恩寵を数え上げていくことは、神への感謝を奉げる一つの方法である。この故にそのいくつかを書き止め、心中の力能の糧とすることにしよう。

私が賜った第1の恩寵は、私が著名な家系に属していたことである。願わくば〔この家系に対する〕私の不相応さが、先祖の人々による浄化によって解消されますように。そしてまた我が内なる喧噪に対しても鎮魂による救済が叶え

られますように。あたかも苦痛に薬物が、火には水が、暑さには寒さが、恋人には逢瀬がそれぞれ癒しとなるように。

第2は、世の中の繁栄と時世の安定である。従前の有力者たちは、インドへの来入者たち (begānagān) に対して常に公平に処遇してきた。私が外形と内実の両面にわたって皇帝の権力の庇護を享受し著明になったとしても、どのような不思議があるというのであろうか。

(279) 第3は、運命の胎盤が私を幸いの世に送り出し、皇帝の影が私の上に投げかけてくれた幸運である。

第4は、父母双方の血筋の尊さである。父方については、何がしかすでに述べた。⁽⁶⁵⁾かの貞節な母方の家系について何をわざわざ書くことがあろう。母は婦人の優美さをすべて身につけており、いつも貴重な時間を見事な仕事ぶりによって飾り立てた。そして悲しみを芯の強さで包み込んでしまい、為すことと口にすることとを一致させていた。

第5は、自分の四肢が健全であり、諸力が正常でかつ均衡がとれていることである。

第6は、今は亡き親愛なる両親に長期間仕えたことである。両親は諸々の内的災難および外的災難から私を守って下さる城塞であり、また内面的不幸及び外面的不幸から私を守って下さる避難所であった。

第7は、恵まれた健康並びに体力回復の旺盛さである。

第8は、相応の住居に恵まれたことである。

第9は、日々の糧に心配がなく、適度の満足をえていたことである。

第10は、両親を満足させたいという幸運な願望を持ち合わせていたことである。

第11は、父の慈愛によって世間の望む以上のものが種々の贈与として与えられ、私を著名な家系の家長に (ba-ābū al-ābā-yi dūd mān)⁽⁶⁶⁾ にしてくれたことである。

第12は、神の御前 (dar-gāh) における祈禱である。

第13は、敬虔な隠棲者たち並びに公正な準則探求者たちを探し求めえたことである。

第14は、絶えることのない神の恩寵 (taufiq) である。

第15は、さまざまな学問分野の書物を次々と閲覧できたことである。気まずい思いをすることなく、あらゆる宗教宗派に関する書を目にすることができ、心の荷を軽くすることができた。

第16は、新知識について父がいつも刺激 (taḥrīz⁽⁶⁷⁾) を与えてくれて、私が困惑した空想のなかに放置されることはなかったことである。

第17は、高潔な仲間たちがいることである。

第18は、家庭を混乱させたり避難しがたい地震 (zamin-larz) とともなりうる凝り性 ('ashq-i şawar) が、私にとっては目差すべき目標へと至るための護送者となったことである。私は恍惚の魔術 (nairangi-yi bū'l-'ajab⁽⁶⁸⁾) によってしばしば新しい刺激を獲得し、時として深い驚嘆に浸っていくのである。⁽⁶⁹⁾

第19は、世界主 (gaihān-khidew 皇帝) への勤仕であって、これは〔私にとって〕2度目の誕生であり新たな至福である。

第20は、自信家 (ru'ūnat) 変じて皇帝の勤勉な丞相 (muyāmin) となったことである。

第21は、天恵の祝福によって普遍的和解 (şulḥ-i kull) という考えに到達したことである。この普遍的和解について、ある者たちは雄弁から沈黙に転じ、他の者たちは (280) 各集団の善良者たちに対して協調姿勢を示すようになり、さらに別の者たちは悔悟して融和的姿勢を取るようになった。願わくは、至高の神 (allāh ta'ālā) が理性の光によって邪悪の絵姿 (naqsh-i badī 融和を壊す醜悪な対立状況) を遠ざけてくれますように。

第22は、神をよく知る人びとの君主が抱く意向に沿えたことである。

第23は、他人の推挙や私自身の獵官運動によることなく、現下の偉大な皇帝による私の親任と任用である。

第24は、学問を積み情愛深く幸いに恵まれた兄弟たちがいてくれたことである。

私の兄シャイフ・ファイジー (Shaikh Faiẓī) についていえば、彼はいうまでもなく、見た目にとっても本質においても完璧さを備えている。けれども私の考えとの一致がなければ立ち止まり、一歩も先へ進むことはなかった。兄自

身は私にとって満足すべき寄進財産 (waqf) のような存在となって尽くしてくれた。また当局に対しては私の幹旋者となってくれたり、篤志家 (nek-andesh) として私の盟友になってくれたりした。兄は、次の頌詩 (qasīda) で私を賞讃してくれているように、自分の作品のなかで私を誉める言葉がないかのような書きぶりを示している。頌詩。

我が言の葉は高み低みに徘徊し
かの人天空よりも高きに比して我が方は大地より低し
我ら二人の父君ありてこそ、かの人の美德を語り
卓絶せし我が親愛の弟を誇りとするなり
学問と知性の証したるアブル・ファズルは我が誇りにして
芳氣漂う魅力の精髓を身につけり
我ら二人の隔てには百年に上る道のりがあるも
^{よわい} 齢でいえば2、3歳の開きに過ぎず
^{まなこ} 庭師の眼をもつてしても、かの木の^{ねず}高みの程は弁ぜず
ヒマラヤスギのいかほど伸びしか杜松の小枝の我には解せず

兄はジャラーリー暦469年、即ちヒジュラ暦954年 (1547) に生まれた。兄に対する称賛はどんな言葉で書けばよいのか。私は僅かながら本書でそれを行っており、共感を吐露して燃えさかる炉を陳述の水で冷やし、氾濫をせき止めて⁽⁷⁰⁾逸る^{はや}気持を緩和した。⁽⁷¹⁾兄の諸作品は言葉の遣い方とその透徹度を示す尺度となるものであるが、これらの作品群は誘惑に駆られた小鳥たち (詩人たち) の格好の草原となって、彼の完璧さを天下に告示するものであり、彼の高潔さを記念するものとなっている。

次はシャイフ・アブル・バラカート (Shaikh Abu'l-Barakāt) である。かれはジャラーリー暦475年ミフル (Mihir) 月8日夜、すなわちヒジュラ暦960年シャッワール月17日夜 (1553年9月25日)⁽⁷²⁾に生まれた。彼は顕著な知性に恵まれているという訳ではなかったが、多くの長所を有しており、折衝術や戦術論、並びに実用上の知識の面において、その名を知られていた。彼はまた人柄の良さや托鉢僧^{ひいき}鼻肩 (darwesh-parasti)、情け深さの点でも目立っていた。

次はシャイフ・アブル・ハイルである。彼は治世第4年イスファンダールム

ズ月10日の昼、すなわちヒジュラ暦967年第1ジュマードー月22日（1560年2月19日）月曜日に生まれた。精神の美質と性格の高貴さは、彼の殊勝な気質に因るものである。彼は時代の趨勢をよく見抜き、言葉をまるで四肢のように理性の指示の下に置いている。

（281）次はシャイフ・アブル・マカーリム（Shaikh Abu'l-Makārim）である。彼は治世第14年ウルディービヒシュト月初日の夜、すなわちヒジュラ暦976年シャッワール月23日（1569年4月9日）月曜日に生まれた。彼は若いころ多少落着きを欠いていたが、偉大な父親の感化を受けて健全にして準則に則った大道に立つようになり、多方面にわたる神学をば靈魂並びに世界諸地域の諸特徴に関する学問にまで押し広めていった。彼は過去の哲学者たちの伝記を読む少し前までは、アミール・ファトフラー・シーラージー（Amir Fatḥullah Shirāzī⁽⁷³⁾）に共鳴していたが、現在は慎重になっている。願わくば彼が目差す岸边に首尾よく到達せんことを。

次はシャイフ・アブー・トゥラーブ（Shaikh Abū Turāb）である。かれは治世第25年バフマン月18日、すなわちヒジュラ暦988年ズール・ヒッジャ月23日（1581年1月29日）金曜日⁽⁷⁴⁾に生まれた。彼の母親は（私の母とは）別の人であったが、彼は宮廷勤めに恵まれて何一つ不自由はない。

次はシャイフ・アブル・ハーミド（Shaikh Abu'l-Ḥāmid）である。彼は治世第38年⁽⁷⁵⁾ダイ月6日、すなわちヒジュラ暦1002年第2ラビー月3日（1593年12月17日）月曜日に生まれた。

次はシャイフ・アブー・ラーシド（Shaikh Abū Rāshid）である。彼は治世第38年バフマン月5日、すなわち上述と同じヒジュラ暦1002年第1ジュマードー月1日（1594年1月14日）月曜日に生まれた。

幸運の家庭に加わったこれら2人の新参者たちは妾腹の子供であったが、育ちのよさの徴候が彼らの顚顚^{こめかみ}から生じている。かの高貴な老師（父上）は2人の子供が生まれてくることについて知らされると、それぞれの名付けをしていた。しかしながら2人の生誕以前に父上は身罷ってしまった。願わくば父上の貴重な遺言によって帝国が幸運に満ちた人々の住む地となり、人々の多様な好意が互いに和合しあうようにならんことを。

兄（ファイジー）は思考活動を停止（死去）してしまっていて、世人を悲しみのなかに投げ込んでしまったが、願わくばたくましく育った別の若木たちが永遠なる幸せに恵まれながら長寿を全うせんことを。そしてまた外形的並びに内面的な善業によって、これらの若木たちが栄光に恵まれんことを。

第25は、高名な家族と婚姻関係を結び、学問ある一族並びに名誉ある家系と姻戚関係を持ったことである。これによって我が家は活気ある様相を呈し、精神は生氣を取り戻すようになった。そしてインド人（Hindi）とペルシア人（Īrānī）とカシュミール人（Kashmiri）の妻たちによって、私の心は潑刺となった。

第26は、幸いをもたらしてくれる息子に恵まれたことである。彼は治世第16年ダイ月18日の夜、すなわちヒジュラ暦979年シャーバーン月12日日曜日（1571年12月30日）に生まれた。父上は彼にアブドゥル・ラフマーン（‘Abd al-Raḥmān）と名付けた。息子はヒンドゥスターニー系人種（Hindūstānī nizhād インド人妻の産んだ子供）であるが、ギリシア人の気質をもっており、学問を身につけている。そして世の中の長短さまざまな事象から多くの知恵を獲得して、幸運の徴候を顔相で示している。皇帝は私の息子を御身の乳兄弟一族と妻^{めあ}合⁽⁷⁶⁾わせて下さった。

（282）第27は、孫に恵まれたことである。治世第36年アムルグード月30日の夜、すなわちヒジュラ暦999年ズール・カーダ月3日（1591年8月13日）金曜日の幸運増幅の時刻に、強運勢のこの孫は生まれ、神の恩寵が姿を取って現われたのだ。皇帝は幸いの園のこの若木にビシュータン（Bishūtan）という名を与えられた。願わくば信仰と現世の双方において偉業を果たし、とこしえの幸いに到達せんことを。

第28は、倫理学（akhlāq）の諸書を愛読したことである。

第29は、知恵（āgahī）を対話によって（az nafs-i nāṭīqa⁽⁷⁷⁾）得たことである。私は長年にわたって存在論（bayānī）と物性論（‘iyānī）のための諸前提（muqaddamāt）の探求者であり、これら2つの分野の専門家たちと多くの交流をもった。そして調査（dalā’il-i zauqī）、証拠（shuhūdi）、帰納（iktisābi）、実見（naẓrī）の方法によって実際に確認した。しかしながら疑

問の道は跡絶えることなく、心の安らうことはなかった。信仰からえられる神の祝福 (mayāmin) によって、この結び目 (giriḥ 困難) は解かれた。その結果、次のことに確信をもった。すなわち対話は精妙さ (laṭīfa) を伴うものであり、精神 (rabbānī) は肉体とは異なって精妙であって、しかも人間の本源的な形態 (paikar-i ‘unṣurī 肉体) と特別な関係を有している、ということである。

第30は、正真正銘のところ、威風堂堂たる権威者たちの威厳 (shukoh) にひるんで私が真実を語ることを差し控えるようなことはなかったし、学問と摂理 (bīnīsh) の究明が妨げられることもなかったことである。財産と生命と名誉の喪失の恐怖がこうした決意をたじろがせることもなく、我が水路 (āb-kardār) の流れは大河 (jūy-bār) の如くであった。

第31は、世のさまざまな考⁽⁷⁹⁾えの方向に心が偏向しなかったことである。

第32は、この大事な書物の叙述が成就したことである。この欽定の書 (kitāb-i ilāhī) の主題は、日々増進する幸運を魅力あふれる言葉で述べて神 (īzād) を賞揚することにより、また恩寵を受けてきたことに対する感謝を書き残すことであるけれども、またこの書はあらゆる種類の知恵の源泉であるとともに、さまざまな知識の鉱脈でもある。またこの書は疲れを知らぬ勤勉家たちにとっては導きの星であり、笑いを売る道化師たちにとってはそこから何かしかの得るものがあり、年少者たちにとっては元気の元手であり、青年たちにとっては矜持の源である。老人たちはこの書によって過ぎ去った日々の経験をいま一度手に入れ、この世の金・銀を気前よく振舞う者たちは人道上の準則をこの書によって知ることができる。それはあたかも、この書が正真正銘の宝石 (gauhar-i binā’ī) にとっては快適な秤量場 (wazn-gāh-i khurram) であり、常緑の牧草にとっては肥沃な大地であり、幸いの朝にとっては熟練工たちの各仕事場の採光窓であり、採掘を待つ宝石にとっては深海のようなものであるからである。幸運に恵まれて名誉を挙げようとする者たちは、この書からその筋道を学び取り、また真実を探究しようとする宗教心の篤い者たちは、数ある諸々の事蹟を記したこの書をよく読み取ることによって親近感を覚えることとなるはずである。さらに、各種の商品を扱う商人たちは利益をえる準則を学び、

勇気を競う闘技場の格闘士たちは、勇者の雄姿をこの書から読み取っていく。精神を磨きあげるために肉体を浄化しようとする者たち（tan-guzārān）⁽⁸⁰⁾は、この書から善行の綱要を手に入れ、幸運をもたらす誠実な心をもつ者たちは、この書から尽きることのない蓄えを集積する。そして真実の安楽所（nuzhat-gāh）に休息を求める者たちは、この書の助けを借りて願いをかなえるのである。対句2首。

人は我が認めし書にいたく驚き
一切の知識をそこから手に得べし
この稀有の書を我が述べし程に
読み手は心の底を輝かさん

上に述べてきたようなさまざまな恩恵のおかげで、この書に関し次のようなよき報せが届き、私の心はそれをはっきりと聴取する。この大業の完成によって善行に叙され永遠の幸福に恵まれん、と。

(283) ムバーラクの息子たる我が身は目下のところ反対者たちの目の敵にされ、世人たちの警戒の的とされており、私に対する愛と憎しみの喧騒が紛議をもたらしている。しかしながら真実を探究する篤信家たちは私のことをアブル・ワフダト（Abu'l-Waḥdat 統一の父の意）と言っており、並ぶものなき神の僕の第一人者と見なしている。また尚武にたけた戦場の勇者たちは私にアブル・ヒママト（Abu'l-Himmat 大志の父の意）なる名を付与し、自己犠牲（hastī-dushman）の達人の一人と考えている。さらに世の理性〔に満ちた人々〕は常に私をアブル・フィトラト（Abu'l-Fiṭrat 叡知の父の意）と位置づけ、この至上なる禁門（宮中）の選良（guzīda-mardum）であると認めている。無分別の巢窟となっている凡俗たちの書き物のなかでは、ある者たちは私を俗世間の信奉者（parastāri-yi dunyī）であると述べ、その渦に呑み込まれた者の一人であると思っており、また他の者たちは私を不信心と無神論への埋没者（munhamik-i kufr u ilhād）に属すと憶測し、非難と叱責を並べたてている。対句。

道化師どもは我が事蹟に百編の作り話を投げかけ
ふたこと
二言、三言反論すればたちまちにして仰天す

アッラーの神の祝福を受けているからには、こうした事情があるからといって私は世の中の奇特な行いから眼をそらすことなく、また非難者と称賛者とに対して好悪を外面に表わすことなく、さらに言葉と意志 (zabān u dil) を嫌悪と喝采によって汚すことはない。対句 2 首。

困惑の頭脳は認知することかなわず
まことの金貨と悪貨の区別に及びもつかぬ
されど高邁の士には知恵が湧く
月の光や木星の輝きが燦然たるごとく

おわりに

この小論は、今を去る10年以上前の東洋史研究会の大会において「アブル・ファズル自序を読む」と題して行なった報告をもとにしている。今回は、インド近世の代表的な歴史家アブル・ファズルの自序の全文をできるだけ正確な日本語に移して紹介することに止めることにした。口頭発表の後、論文発表の形を考えている間に時間のみがいたずらに遷延してしまい、東洋史研究会に大変な迷惑をおかけしてしまうこととなった。私はこのことを先ずはじめにお詫び申し上げなくてはならない。ここでは紙数の関係上、当該自序の邦語訳を、それに必要とされる程度の注釈を施して紹介する形のものに止めている。

今回の論文発表に至るまでの間に、必要があつて私はアブル・ファズルに関連する次のような小論を発表した。それらは「シャイフ・ファリード・バッカリーのアブル・ファズル伝について」(『西南アジア研究』70,2009年)、「アーザードのアブル・ファズル伝について (一) (二) (三) (四)」(『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』5,6,7,8,2009-2012)、「シャー・ナワーズ・ハーンのアブル・ファズル伝について」(『西南アジア研究』78,2013年)である。

真下裕之氏と二宮文子氏と和田郁子氏の3氏は協同して『アーイーニ・アクバリ』(『アクバル会典』)の日本語訳に詳細な訳註を施して発表する作業を目下進められつつある。それらは真下裕之監修、二宮文子・真下裕之・和田郁子訳註「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』訳註 (1) (2) (3) (4)」(『神戸大学文学部紀要』40,41,42,43,2013-2016年)である。併せて参

照されるようおすすめする。

自序といえば司馬遷が『史記』最終巻の第130巻として配した太史公自序がよく知られている。東洋史学の先達内藤湖南は、『史記』編纂の趣旨や司馬一家の伝記を記したこの自序に早くから注目し、精読すべき大切な箇所であると指摘していた⁽⁸¹⁾。中国の史書や今回紹介した『アクバル会典』のように、自序を巻末に配するという考え方がインド史上の史書においてどの程度定着していたのか、私にはまだ詳らかではない。但しアブル・ファズルは数多くの筆耕を自分のもとに擁し、原稿を書き上げていくに従って写本の作製にたずさわらせていたようなので、一書を書き上げた後に自序を収載するとすれば、それが巻末に配置されるのは不自然な形ではない⁽⁸²⁾。

アブル・ファズルはこの自序のなかで、自分の師であった父シャイフ・ムバーラクについて多くの紙数を割いている。ムバーラクは柔軟な思考のできる思想家であり教育者であった。彼はスール朝イスラーム・シャー時代（1545-1554）には新興のイスラム教マフディー派の流れを汲むシャイフ・アライーを庇護しているとの嫌疑を受けた。このときは事なきを得たものの、アクバルの治世第14年（1569-1570）以降になると、ムガル朝枢要部において宗教上隠然たる勢力を有する保守派の逆恨みによる陰湿な妨害工作を受けた。このときはアブル・ファズル一家の存亡にとって最大の危機であった。彼の自序はその約3分の1の紙数を割いてこの時の逃避行の叙述に当てているのが一大特色となっている。またアクバル時代に桂冠詩人となった兄シャイフ・ファイジーをはじめとする一族の活動についても、簡潔にまとめて記録している。

アブル・ファズル自序は、インド史上最も注目される歴史家の一人であったアブル・ファズルの事跡や考え方、およびそれらに関連する事象について極めてよく伝える記録であり、この歴史家について深く知るためには欠かせぬ第一級の文献であるといえることができる。

注

- (1) 底本のカルカット版, II, p. 1259, l. 13は‘imārat（建物の意）であるが、ラクナウ版, III, p. 327, l. 3およびBL写本, f. 446b, l. 4に拠って訂正した。なおJarrettも英語版, III, p. 418, n. 2で‘imāratがimāratの間違いであることを

指摘している。

- (2) インダス川下流のタッタ州北部にある県名および同県の中心都市名。別名セーワーン (Schwān)。
- (3) あるいはリール (Ril) の読み方が正しいかもしれない。この町の所在地を特定することは難しい。
- (4) カルカッタ版, II, p. 260, l. 19は *intizām-i ān hangām namāyad* (その時を整えて) となっており、また Jarrett の英語版, III, p. 420, l. 12は *attend his lectures* (彼の講筵に出席せよ) となっているが、ラクナウ版, III, p. 328, l. 16と BL 写本, f. 447a, l. 14はともに *intizām* を *intizār* としているので、それに従って訳した。
- (5) ラウナウ版, III, p. 329, l. 4は「知恵の声」(*āwāz-i āgahī*) となっているが、カルカッタ版, II, p. 260, l. 26は BL 写本, f. 447b, l. 2と同様に *āwāz-i āhī* となっているのでそれに拠った。
- (6) テクスト校訂者ブロックマンは既出の「さて要するに」からここまですべての段落としており、主としてシャイフ・ムバーラクとシャイフ・ファイヤージーとホージャ・アフラルの3人が登場するところであるが、ペルシア語特有の主語の省略や隠喩の多用が目立つため、文意を正確につかむのに苦労するところである。そのために英訳者ジャレットは英語版, III, p. 420, n. 2において、この部分の文意の把握に苦労した旨こぼしている。私はこの長い段落を三つに区分し、必要な言葉を補いながら訳出してみた。ジャレットの理解とは異なるところもあるので、関心のある方は双方の訳を比較していただくと有難い。
- (7) マールデーヴはマルワール地方の王 (ラージャ)。フマーユーンは1540年のカナウジュの戦いでシェール・シャーに敗れた後、シンド地方滞在中マールデーヴの招待を受けてラージャスターン地方に入ろうとしたが、マールデーヴの二心を知ってウマルコートへと退いた。
- (8) カルカッタ版, II, p. 261, l. 9は *wālā-naḥārīr*, BL 写本, f. 447b, l. 10は *wālā-tajārī*, ラクナウ版, III, p. 329, ll. 13-14は *wālā-najār* となっていて、いずれも意をなさない。ここは *wālā-nakhwārī* と読むべきであろう。
- (9) イスラーム法学のマーリク学派、シャーフィイー学派、ハナフィー学派、ハンバル学派のスナ派4大法学派、およびシーア派のイマーム学派の学説をさす。
- (10) 底本では *ḥawṭa* となっているが、BL 写本, f. 447b, l. 14の欄外注とラクナウ版, III, p. 329, l. 17によって改めた。
- (11) 12世紀のイラン出身のアブドゥルカーヒル・スフラワルディー ('Abd al-Qāhir Suhrawardī) を祖とする学派。光を重視する。
- (12) 底本も BL 写本, 447b, l. 16もこのようになっているが、ラクナウ版III, p.

- 330, l. 1では^{しょうみょう}声明 (nāla) となっている。
- (13) 1165年スペイン生まれの汎神論的神秘主義者。メッカ巡礼を果たし、ダマスカスに没す。多くの著作によってイスラーム世界のみならず、ヨーロッパのスコラ哲学にも影響を及ぼした。1240年没。
- (14) 1181年カイロ生まれ。青年時代に神秘主義者となり、カイロ東部の丘や砂漠に住み、アラビア半島西岸のヒジャーズ地方に居住した後、再びカイロに戻った。頌詩集 *Diwān* が有名。1235年没。
- (15) 1207年生まれ。父の死後イブン・アラビーの養子となり弟子となった。神秘主義に関する数多くの著述を残す。彼の名を底本は Qūniyawī としているが、ラクナウ版, BL 写本とはともに Qūnawī と表記している。
- (16) ブハーラ出身の大学者イブン・シーナー (Ibn Sīnā 980-1037) の *Kitāb al-shifā'* (『治癒の書』) をさす。
- (17) 同じくイブン・シーナーの *Kitāb al-ishārāt wa al-tanbihāt* (『指示と所見の書』) をさす。
- (18) 英語版, III, p. 422の注記によると、これは文法家 Abū 'Alī Ḥasan bin Aḥmad al-Fārsī (1581年没) の作になるタズキラ (伝記) ではないか、という。
- (19) ギリシアの天文学・地理学の学者プトレマイオスの主著『アルmagest』(*Almagest*)。この書名はアラビア語定冠詞を付けた al-Majisṭī が転訛したもの。
- (20) カスピ海に近いアスタラーバードに1339年生誕。エジプト、トルコに学んだ後イランのシーラーズで教え、哲学、法学、言語学等の分野で多くの注釈書を残す。1413年没。
- (21) 神の示す瑕疵のない美。
- (22) アフマダーバードからキャンベイに至り、そこから海路スーラトに到着すると、デカン地方の交通要衝ブルハーンプルを経てアーグラへと続く幹線道が開かれていた。
- (23) 特定の宗教教育ではなく、一般の子弟を教える塾ないし学校の教育。
- (24) ジャラーリー暦はセルジューク朝マリクシャー (在位1072-1092) の時代に成立した暦法で、ヒジュラ暦471年ラマザーン月 9 日金曜日 (1079年 3 月15 日) を元年元日とする太陽暦である。アクバルは、ペルシアでヒジュラ暦とともに用いられていたこの暦法をインドに導入し、自らの治世年も春分の日を元日とするこの暦法によって記録させた。アブル・ファズルはこの暦法をマリキー暦 (Ta'rikh-i Maliki) として『アクバル会典』のなかで簡単に紹介している。 *Ā'in-i Akbarī*, text, I, 277, Eng. tr., II, p. 29.
- (25) ヤムナー川左岸、バーブルが築造したチャール・バグ (Chār-bāgh) の近傍。アーグラの中心街から浮橋でヤムナー川を渡り右折したところ。

- (26) 自分にも他人にも災禍をもたらす言葉を慎み、自らの本心を軽々に明かさなかったことをいう。
- (27) 学校（塾）経営のスタッフに迎えたことを意味する。
- (28) ムガル朝フマールユーンをインドから追放してスール朝を興こしたアフガル系のシェール・シャー（在位1540-1545）。ムガル朝側の文献では、自分たち以外の他勢力の首長に対して「王」を意味するシャー（Shah）を使用せず、単にシェール・ハーンで通す。
- (29) スール朝第2代スルターン・イスラーム・シャー（在位1545-1553）。
- (30) トゥユールは一般にジャーギール（jāgīr）と同じく領地を意味するが、ここではマダディ・マアシュ（madad-i ma'āsh）と同様に恩賞地を意味する。優れた学者に与えられる免税地である。
- (31) 「天国の巢作り所の人」の意で、フマールユーンの諡号である。
- (32) ヘームーはスール朝時代にヒンドゥー教徒の商人から市場監督官に採用され、それ以後才能を発揮してスール朝崩壊後も残党を率いてムガル軍に抵抗し、アーグラ、デリー地方を自分の支配下においてしまった。彼は1556年11月の第2次パーニーパトの戦いで敗死するが、ここではそれ以前の勢威盛んなときのことを述べている。
- (33) 邪眼を熾蒸するために焚かれるという。
- (34) アブル・ファズルはヒジュラ暦958年ムハッラム月6日（1551年1月14日）、アーグラで生まれた。
- (35) ここではシャイフ・ムバーラクのもとに集まって、飢饉から避難していた学者や学生たちをさしている。
- (36) 世界の終末前にマフディー（mahdī 救済者）が現われて、宗教と正義を再興すると考える人々の集団。イスラーム教の歴史上、マフディーを説く運動は度々興ったが、インドではバナーラス近郊のジャウンプール出身のミール・サイイド・ムハンマド・ジャウンプーリー（Mir Sayyid Muḥammad Jaunpūrī 1443-1505）を祖とする宗派主義的集団の運動が知られている。彼は自分が宗教と正義の再興者であると説き、アフマダーバードを中心とするグジャラート地方に多くの信者を獲得したが、やがてインドを追放されアフガニスタン西部のファラー（Farāh）で死去した。その後16世紀の前半、グジャラートのアフマド・シャーヒー朝ムザッファル2世（在位1511-1526）によってその地方の信者たちは禁圧された。
- (37) 底本のカルカット版には「よこしまな武器となる」（tabāh baseji-yi）の表記が欠けているが、ラクナウ版, III, p. 334, l. 14およびBL写本, f. 450a, l. 9余白追記によって補った。
- (38) この件に関しては、後続の本文を参照。
- (39) サイイド（Sayyid）は預言者ムハンマドに連なる親族の子孫をさす。ここ

で取り上げられている人物は、ミール・サイイド・ムハンマド・ジャウンブーリー（Miyān ‘Abd Allah）の信奉者であったアフガン系のミヤーン・アブドゥッラー（*Miyān ‘Abd Allah*）をさすものと思われる。彼はスール朝イスラーム・シャーのときに笞打ちの刑を受けるが蘇生し、1592年90歳で死去した。彼は晩年はマフディー派と縁を切り、アクバルから恩賞地の授与を受けた。ここの記述はそのことを踏まえているようである。この人物については、H. Blochmann (tr.), *The Ain i Akbari by Abul Fazl ‘Allami*, Vol. I, Calcutta, 1873, pp. v-ix; 2nd edition, by D.C. Phillott, 1927, pp. xxix-xxxii参照。

- (40) ここの文章は底本のカルカッタ版（II, p. 266, l. 26-p. 267, l. 1）、ラクナウ版（p. 337, l. 19）、BL写本（f. 451b, l. 10）でそれぞれ多少の違いがあるが、ここでは最も明解なカルカッタ版のみに拠っている。
- (41) この長い翻訳文はJarrettの英訳文（vol. III, p. 430）とニュアンスをかなり異にしている。
- (42) 以上の連句に続けてラクナウ版, p. 339, ll. 18-19およびBL写本, f. 452, l. 8には、次の対句が含まれている。「互いの対立から内面に逃避せしゆえ、親しき者の情愛を得ることなし」（ham ba-dushman darūn gurizam zān-kī, yāri az dostān na-mī-yābam）。底本のカルカッタ版では、この部分が省かれている。
- (43) この「陰険に事を運ぶ」（pizhmān-ṭarāz）の表現は、ラクナウ版とBL写本には欠落している。
- (44) 「俗世間の人物たちの…」以下の文章のペルシア語原文に対応する英語版の文章（Jarret, III, p. 435, ll. 9-11）は、文意が明晰ではない。ここでは、必要な言葉を補って明解な文章に訳出している。
- (45) この辺の文章は、原文の意を踏まえながら言葉を補って訳している。英語版, III, p. 436, ll. 2-5のJarrettの訳は原文との対応が少しずれているように思われる。
- (46) 底本 p. 272, l. 1ではこの語が i’rāq となっているが、ラクナウ版, p. 346, l. 7 および BL 写本, f. 455b, l. 10ではいずれも ighrāq となっているため、これらに拠って訂正した。ウルドゥー語版, II, p. 412, l. 1では、この語を tabāhi（没落）と訳している。
- (47) 底本 p. 272, 下注 2 によると、āq-saqāl の表記もあるとのことである。J.T. Zenker, *Türkisch-Arabisch-Persisches Handwörterbuch*, 2 Bde, Leipzig, 1866, 1876, reprint, Hildesheim, 1967, pp. 75, 571によれば āq-ṣaqāl また āq-saqāl, āq-ṣaqallū は「白ひげ」の意で老人、長老、首長などを意味する。
- (48) この文章は、アブル・ファズル特有の修辞法を援用して、アークラからファテブル・シークリーまでの約40キロメートルの夜道を身元を潜めて移動したことを述べたものである。

- (49) アクバルの乳兄弟 Khān A‘ẓam Muḥammad ‘Azīz Kokaltāsh を指しているものと思われる。彼は短縮形 ‘Azīz Koka で呼ばれることが多い。
- (50) アジーズ・コーカルターシュを指しているようだ。
- (51) この句の原文は gūsh az bāng-i darā’i (底本 p. 274, l. 5) とあるだけであるが、ウルドゥー語版 (II, p. 414, ll. 21-22) を参考にしながら、かなり言葉を補って訳している。
- (52) この辺りの文章は、ウルドゥー語版 (II, p. 415, ll. 5-7) を参考にして訳出した。
- (53) ここの所の原文は、底本では wa hangāma-yi dars wa khalwat-gāh-i taqaddus-rā ā’in bastand (p. 274, ll. 23-24) となっているが、ラクナウ版では後半が khalwat-gāh-i muqaddas-rā āzīn bastand (III, p. 349, l. 13) となっており、BL 写本では khalwat-gāh-i taqaddus-rā āzīn dar-bastand (f. 457 a, l. 15) となっている。意味に大差はない。
- (54) ホージャ・クトブッディーン・ウーシーは東部フェルガーナ地方のウシュ出身のチシュティ派スーフィー聖者。1235年没。シャイフ・ニザームッディーン・アウリヤーもチシュティ派のスーフィー聖者。1325年没。前者を記念する巨大尖塔クトブ・ミナルを中心としたクワトゥル・イスラーム (Quwwat al-Islām) モスクと、後者を記念する聖者廟 (dargāh) はそれぞれデリー・スルターン朝時代に建立され、いずれもデリーの南郊に位置している。
- (55) このパラグラフとこれに続く次のパラグラフにおいては、文意を明確にするために原文にはない補足語の追加をやや多くしている。
- (56) 「もし〔この間の〕事情を詳細に述べれば」で始まるこの文章は、カルカット版では丸カッコでくくられ (II, p. 275, ll. 17-18)、英語版もそれに従っているが (III, p. 441, ll. 11-13)、ここではラクナウ版に従い (III, p. 350, ll. 14-15) 丸カッコは用いないこととする。もちろん、写本では丸カッコが使用されるわけではない。
- (57) 英語版ではこの日付を1586年5月31日としているが (III, p. 441)、Pillai, V, p. 376によって訂正した。この日は西洋暦では金曜日であるが、太陰暦では月の出をもってその日が土曜日に変わる。
- (58) 「自分の日常の身辺記や」以下の文章の原文は ba-āwāra-nawisi-yi rozgār-i khwud wa perāya-yi nafs-i Abu’l-Badā’i’ roz guzarānīdi. である。原文中の Abu’l-Badā’i’ の意が判然としないので、止むをえずここでは英語版 (III, p. 442, ll. 4-5) を参考に訳出した。ウルドゥー語版 (II, p. 417, ll. 21-22) の方はこの文章の後半を …dnyā se kināra kashī aur nafs-e Abu’l-Badā’i’ kī ārāstagī meñ mashghūl the (世事から撤退しアブル・バダーイー論の仕度に従事した) となっている。

- (59) 英語版はこの日を1593年8月4日火曜日としているが (III, p. 442)、Pillai, V, p. 389によって訂正した。
- (60) 底本の「7歳のとき」(dar haft sālagi) は、ラクナウ版 (III, p. 352, l. 12) と BL 写本 (f. 458b, l. 10) とでは「15歳のとき」(dar pānzdah sālagi) となっている。カルカッタ版に拠って英語版を用意したジャレットはこのことについて何も触れていないが、この文章に続く内容を勘案すると、ここは「7歳のとき」よりも「15歳のとき」の方がよいように思われる。ウルドゥー語版は「7歳の年齢で」(sāt bars kī ‘umr men) となっている (II, p. 418, l. 17)。なお「7歳のとき」に続く「父上の宝庫」(khazā’in-i pidar-i buzurgwār) は、ラクナウ版と BL 写本ではいずれもはっきりと「父上の知識庫」(khazā’in-i dānish-i pidar-i buzurgwār) と表記している。
- (61) 底本 (II, p. 277, l. 15) も BL 写本 (f. 459a, l. 4) もこの「要諦」と訳した語を naqāwḥā と記しているが、これは naqāwathā の誤記であろう。一方ラクナウ版 (III, p. 353, l. 7) ではこの語を tafāwathā と記しているが、これは明らかに naqāwathā を不用意に誤記したものに違いない。
- (62) muṭawwal は「詳説」や「詳解」を意味する語で、この注釈書の略称であったと思われる。一方、注解 (疏注) の著者や書名については何も述べていない。
- (63) 底本 (p. 278, ll. 2-3) も BL 写本 (f. 459a, l. 17) もこのようになっているが、ラクナウ版 (III, p. 354, l. 2) では bar を省略してイザーファで読ませている。The Encyclopaedia of Islam, new edition, VI, p. 381によると、イスファハーニーは Shams al-Dīn Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Maḥmūd al-Iṣfahānī (1219-1289) で、シリアの町マンビジュ (Manbij) の判事 (qāḏī) を務めたことのある人物である。
- (64) ここでは『アクバル会典』を書き上げたことをさしているようである。
- (65) この自序のなかでアブル・ファズルが自分の父について相当詳しく陳述していたことは、すでに紹介した通りである。またアブル・ファズルは『アクバル会典』第1巻第2編の第30章 (ā’in) 「帝国の高官たち」のなかの「帝国の学者たち」中の第1群劈頭に父シャイフ・ムパーラクを配置している。カルカッタ版, I, p. 233, 英語版, I, p. 537.
- (66) このところは、ラクナウ版では意味をなさない誤記となっており (III, p. 355, l. 12)、BL 写本では al-ābā-yi が al-ā-yi となっている (f. 460a, l. 9)。
- (67) 底本 (p. 279, l. 20) もラクナウ版 (p. 355, l. 16) も taḥriṣ となっているが、BL 写本 (f. 460a, l. 12) によって訂正した。
- (68) ここで「凝り性」と訳した ‘ashq-i ṣawar は、「偏愛」よりももっと強い意味を表わし、「偏執」や「片意地」に近い意を表わしているように思われる。英訳者の jarrett はこれを ‘a material love’ と訳しているが、医学や心理学の

発達した今日から見れば適切な訳とはいえないであろう。

- (69) この第18項は、アブル・ファズルが成長期や成人してからの自分の心理的、精神的特徴について自己分析を行なったところである、と見るができる。今日の我々が読んでも驚くほど彼は冷静に自己分析を行なっている。彼は自分にある種の偏執狂 (monomania) 的な性向・気質のあることを自覚していたようだ。
- (70) アブル・ファズルは、『アクバル会典』第1巻第2部第30節 (ā'in) 「帝国の大官たち」において、官位400位の高官たちを紹介したところで、その冒頭に兄ファイジーを配している。またこの第30節中の同時代の詩人たちの精選された韻文作品を紹介したところにおいても、その劈頭にファイジーを配し、彼の頌詩やガザル、ルバーイーを破格的に多く例示しながら最も詳しく紹介している。カルカット版, I, pp. 228, 235-242、英語版, I, pp. 490, 548-563.
- (71) 「私は僅かながら」で始まるこの文章に対応する Jarrett の英訳 (Eng. tr., III, p. 447, ll. 25-28) には無理があるように思われる。ここでは別様に訳している。
- (72) 原文は shab-i hafdahum shawwāl で、直訳すれば「シャッワール月17日の夜」の意であるが、アブル・ファズルの用法では shab (夜) が日付の前に付くと、その日の西暦対応日はその1日前の日に対応する。従ってこの日は9月26日ではなく9月25日をさしている。Jarrett の訳もそのようになっている (Eng. tr., III, p. 447, l. 下4)。同様の shab の用法は次ページの原文でも出てくる (text, II, p. 281, l. 1)。
- (73) アクバル時代の学者。当初ビジャープル王家に仕えていたが、アクバルの意向を受けてトータル・マル (Todar Mal) の後のムガル朝の財政改革の任に就いた。Beveridge, H. and Baini Prashad (trs.), *The Maāthir-ul-Umarā*, Vol. I, Calcutta, 1941, reprint, Patna, 1979, pp. 543-546も参照。
- (74) 1581年1月29日は実際には日曜日である。このためであろうか、Jarrett はヒジュラ暦988年ズール・ヒッジャ月23日を1581年1月27日の金曜日に当てている (Jarrett, III, p. 448)。
- (75) ジャレットはこの年を治世第30年と誤記している (Jarrett, III, p. 448)。なおテキストには「ダイ月6日」の直前に Khwurdād なる語が入っているが、これは衍語であろう。
- (76) アブル・ファズルの息子アブドゥル・ラフマーンはアクバルの乳兄弟サアードト・ヤール・コーカ (Sa'adat Yār Kokah) の姪と結婚した。
- (77) 直訳すれば「会話の相手から」の意。
- (78) ジャレットは bayānī と 'iyānī をそれぞれ ontology と physics に訳している。今はそれに従うことにした (Jarrett, III, p. 449)。
- (79) 厳密に言えば、アクバル時代の治迹録たる『アクバル・ナーマ』の記述はア

クバルの統治が続く限り完結しない。従って叙述が成就した「この大事な書物」は、1598年3月に完結した『アクバル会典』をさしていると考えられるべきかもしれないが、完成の域に近づきつつあった治迹録部と完成した制度集成部との双方を含めた大構想の『アクバル・ナーマ』をさしていると考えるのが自然のように思われる。

- (80) 底本のカルカッタ版は *tan-gudāzān* と誤記しているが (III, p. 282, l. 22)、ラクナウ版 (III, p. 359, l. 13) と BL 写本 (f. 461b, l. 9) によって改めた。
- (81) 内藤湖南『支那史学史』『内藤湖南全集』第11巻所収、筑摩書房、1969年（初版弘文堂、1949年）、108-109ページ。
- (82) 近藤「シャイフ・ファリード・バツカリーのアブル・ファズル伝について」『西南アジア研究』70, 103ページによれば、皇子サリーム（後のジャハーンギール）がかねてよく思わぬアブル・ファズルの家の中に踏み込んでみたところ、クルアーン製作中の筆耕40人をそこに見出したので、彼らを引き連れてアクバルの目の前に差し出した、という。